



# 教職大学院 Newsletter

# No. 71

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2015.4.4

## 知識社会の対位旋律を奏でる教育の使命

福井大学教職大学院 准教授 木村 優

平成27年2月28日(土)、実践研究福井ラウンドテーブルのSession 0として、ポストン・カレッジ教授・アンディ・ハーグリーブス氏、学習院大学教授・佐藤学氏、東京大学大学院教授・秋田喜代美氏をお招きし、「知識社会の教師の資本」と題したシンポジウムを開催した。このシンポジウムにおいて、シンポジスト3者からそれぞれ、知識社会が進展しつつある日本の教育改革及び教師教育改革の方向定位が示されるとともに、参会された様々な専門職、特に知識社会の学校と教師へ温かなエールが送られた。

知識を最重要視する経済、すなわち「知識経済」が今を生きる私たちに対して「イノベーションを絶え間なく生み出す力」、「創造性を発揮する力」、「他者と円滑にコミュニケーションを行う力」、「チームで働く力」等、いわゆる「キー・コンピテンシー」や「21世紀スキル」という名で呼ばれる力の必要性を主張するようになった。しかし、ハーグリーブス氏はシンポジウムにおいて、「知識社会という言葉がいつのまにか知識経済という言葉に置き換えられ、そこで知識社会に含意される重要な事柄が捨象されている」と述べ、「21世紀の六分の一が過ぎ去ろうとしている今こそ、『知識社会』について実践者と研究者で協働探究する時だ」と私たちに語りかけた。

「知識社会」とはそもそもどのような社会なのだろうか。モノの生産と流通が経済利益を生み出す「産業社会」とは異なり、知識・情報・対人サービスの提供、新たな知識や理論の創造が経済利益を生み出すのが「知識社会」とされる。しかし、この捉えは「知識社会」の経済的一面に過ぎない。ハーグリーブス氏は『知識社会の学校と教師』（2015年、金子書房）の序論で以下のように明確に述べている。

知識経済は他の資本主義形態と同様に、ジョセフ・シュンペーターが述べた「創造的破壊」をもたらすものである。知識経済は成長と繁栄を刺激する一方で、人々に利潤や私欲を無慈悲なまでに追求させるために社会秩序をねじ曲げ、断片化させてしまう。ゆえに学校は、他の公的機関とともに、知識経済がもたらす最も破壊的な影響を埋め

る力を培わなければならない。その力とはすなわち、他者への思いやり、コミュニティ、そして地球市民としての自覚である。知識経済は私的な資本を優先的に供給し、知識社会はまた公的な資本を含む。だからこそ学校は、若者たちが私のおよび公的な資本をとにも獲得できる場でなければならない。(p. 2)

私たち教育専門職は、これからの未来を生きる子どもたちに対して、「他者への思いやり」、「コミュニティ」、「地球市民としての自覚」を培い、育んでいく必要がある。つまり、成長と繁栄を無慈悲に追求する知識経済が人々に及ぼす様々な「脅威」に対して、学校と教師、そして教育にかかわるすべての人々が対位旋律を奏でることが知識社会の教育の使命なのである。

この対位旋律を奏でるために、私たち教育専門職は「認知的な学び」と同じくらい「情動的な学び」を強調し、集団内での「関係づくり」を奨励し、「多様性」の中で「創造性」を育むことに協働で探究し、挑戦することになるだろう。この挑戦を支える一つの手がかりが「知識社会を知ること」であり、もう一つの手がかりが「専門職の資本 (Professional Capital) を培うこと」だろう。福井大学教職大学院と関係諸機関は、これらの手がかりを常に探究し続け、そして教師教育カリキュラムへと統合するよう試みている。

### 内容

- 知識社会の対位旋律を奏でる教育の使命 (1)
- 教員免許状更新講習の現状と課題 (2)
- スタッフ退任・兼任終了のご挨拶 (4)
- 実践研究福井ラウンドテーブル特集 (6)
- スクールリーダー便り (23)
- インターンシップ/週間カンファレンス報告 (28)
- 研究集会・公開研究会などの報告(29)
- 平成26年度修了生の学校改革実践研究報告タイトル (34)
- 平成27年度福井大学教職大学院年間計画 (35)

## 教員免許状更新講習の現状と課題

福井大学教職大学院 教授 松田 通彦

教員免許更新制は、教員が定期的に最新の知識技能を身に付けることで必要な資質能力を保ち、自信と誇りを持って教育に取り組み社会の尊敬と信頼を得ることを目的として平成21年4月1日に導入された。当初、その意義や在り方について様々な議論が展開されたが、今年度末をもって6年が経過する今、同制度は関係者の間でかなり定着してきたように思える。

更新講習受講者は、本人の専門や課題意識に応じて、教育の最新事情に関する事項を必修領域として、また、教科指導、生徒指導その他教育の充実に関する事項を選択領域として必要な講習を受講する必要があるが、本学においても受講者各位のニーズに配慮し、毎年いずれの分野・領域も創意工夫に富んだ講習を開講してきた。

とりわけ、本学教職大学院が深く携わっている必修領域の更新講習は、当該年度の受講者全員が受講するものでもあるため、県の教育委員会等の協力を得て受講対象者数を把握しながら、今年度も計画・立案を慎重に進めてきた。結果として、受講者数は昨年度を下回るようになったが、参加者からは過年度と同様もしくはそれ以上の高い評価をいただいたと自負している。

平成26年度と同講習の日程を全て終了するに当たり、この紙面を割いて、主に「教育実践と教育改革Ⅰ及びⅡ」の講習に係る現状と課題について省察を試みるが、内容については、拙稿「教員免許状更新講習と教師教育改革」：教育実践と教育改革（2014年度報告書）を一部リライトしたものであることを、予めお断りさせていただきたい。

本学の教員免許状更新講習の必修領域「教育実践と教育改革Ⅰ」と選択領域「教育実践と教育改革Ⅱ」の内容は、教職大学院の教師教育改革に係るコンセプトが大きく反映されている。即ち、「新しい時代をひらく教師の実践コミュニティ—実践の経験と知恵を共有するために語り聴き・読み綴る—」をキーコンセプトに、専門職としての教師が互いに探究し合う方法を取り入れた講習を実施しているが、特長的なこととして、次の3点を強調している。

- ① 教職大学院の教師教育の理念を活かして、実践と省察の往還を重視したプログラムにしていること。
- ② 必修講習12時間（1、2日目）に選択講習6時間（3日目）を加えた合計18時間（3日間）で完結する講習として提供していること。
- ③ 少人数グループによる語り合い・聴き合いを基本にし、そのグループ編成は、校種、年齢、教科、地域等の壁を超えたものになっていること。

具体的に説明すると、1日目は、受講者が予め作成・持参した自らの教育実践を簡潔にまとめた3つの種の報告から始まる。各自の教育実践の経験を交流し

課題意識を共有するためであるが、グループのメンバー相互の自己紹介の機会を兼ねている。その後、グループ内で、多岐に亘る多くの優れた実践記録資料を読み深め、展開の筋道を辿りながら内容を報告し合う活動に取り組む。2日目は、これらの資料の中から最も関心の高い実践事例を取り上げ考察したことを各自レポート（小論文）にまとめ、その後、また新たなメンバーで構成されるクロスセッションの中で報告し合う。3日目は、受講者自身の教師としての歩みを振り返り今後の展望を拓く目的で、自らの教育実践レポート（小論文）の作成に取り組み、その後、クロスセッションを通して省察を深めるというカリキュラムになっている。また、こうした活動を円滑かつ有意義に進めるため、喫緊の教育課題や教育改革の動向に関するミニ講義や講義を随所に饅めながら、更新講習のねらいが達成されるようマネジメントがなされているのである。

受講者個々人の尊い教育実践をじっくり時間をかけて語り・聴くというのが必修領域更新講習の重要な座標軸になっているが、講習後のアンケートで出される様々な要望や課題に対応するため、毎年、内容や形態の部分的変更・改善を余儀なくされている。お陰様で、ここ数年、決定的かつドラスティックな方向転換を迫られるようなトラブルはないが、最も大きな課題は受講者数の減少である。この点については後で詳述する。

今年度の講習内容と運営方法については、基本的に昨年度のものを踏襲した。1点懸念されたのは、実践レポート（小論文）の作成・提出方法の変更による2年目の影響であった。これは、従来、「レポートは、講習後に感想や振り返りも併せて完成原稿として提出することになっていたものを、「レポートは、講習期間中に完成できない場合に限り後日提出とし、完成できなかったものは講習終了と同時に提出する」ことを可能にしたものである。この変更の背景として、以前の表現では、期間中に完成しないことが前提になっていたかのような誤解を与えてしまうことへの対策があったためであるが、心配されたのは、振り返りの時間が十分に保障されないことによるレポートの質的低下であった。しかしながら、全てのレポートを読ませていただいたが、当方の杞憂に終わったようである。

ところで、今年度の必修領域の免許状更新講習は、夏季休業中に4回、冬季休業中に1回の計5回開催してきた。酷暑と厳寒という時期的課題に対応するため、室温の管理調整やプログラムの遅延なき進行等、運営面では最大限の配慮をさせていただいたつもりであるが、受講者各位には本講習のねらいや趣旨をよく理解し積極的に実践の省察に取り組んでいただいたことに敬意と感謝の意を表したい。

言わずもがなであるが、本講習におけるねらいは、結局のところ2点に集約されると考えている。1つは、省察的実践の大切さである。なぜならば、実践の振り

返りというのは、私たちプロの教師にとって、常に意識下に置かねばならない必要不可欠な教育的営みだと考えるからである。今後とも受講者各位には、実践と省察を繰り返しながら、自信と誇りを持って日々の教育実践に積極的に取り組んでほしいと念じている。

今ひとつは、これからの時代を生きる教員は、単に教える専門家だけではなくて、自らも謙虚に学び続ける専門家であり続けるというアイデンティティをしっかりと確立しなければならないのではないかとこの点である。つまり、思考力、判断力、探究力、表現力を子どもたちに身に付けさせたいのであれば、教師自身も

自分の力量のブラッシュアップに努力し続けなければならないということでもある。受講者に対し、実践を語り、聴き、読み、綴るという活動に丁寧に取り組んでいただいた意味の1つはこの点にある。こうしたことを念頭に置いて3日間の講習のプログラムを構築してきたつもりでもある。

次に、受講者の視点から、過去6年間の総括と評価を試みたい。下表は、年度ごとの受講者数の推移及び「Ⅰ 講習の内容・方法」「Ⅱ 知識・技能の習得の成果」「Ⅲ 運営面」の3項目に対して4段階で受講者が評価した結果を示したものである。

(表) 福井大学教員免許状更新講習の受講者評価

教育実践と教育改革Ⅰ						(単位:%)							
年度	受講者数 (人)	Ⅰ				Ⅱ				Ⅲ			
		よい	だいたい よい	あまり 十分でない	不十分	よい	だいたい よい	あまり 十分でない	不十分	よい	だいたい よい	あまり 十分でない	不十分
平成21年度	481	42.6	50.8	6.6	0.0	48.2	47.0	4.3	0.5	55.7	33.3	10.4	0.7
平成22年度	291	34.0	59.5	6.2	0.3	44.7	49.9	5.1	0.3	53.8	40.2	5.6	0.3
平成23年度	576	37.5	55.8	6.7	0.0	49.8	44.5	5.6	0.2	53.4	41.8	4.4	0.4
平成24年度	383	43.4	49.6	6.0	0.9	44.7	48.2	6.5	0.6	51.2	43.8	4.4	0.6
平成25年度	294	56.0	42.1	1.9	0.0	59.5	39.1	1.4	0.0	70.3	28.3	1.4	0.0
平成26年度	245	52.7	43.3	3.5	0.5	55.8	40.1	4.1	0.0	64.5	34.0	1.3	0.2

教育実践と教育改革Ⅱ						(単位:%)							
年度	受講者数 (人)	Ⅰ				Ⅱ				Ⅲ			
		よい	だいたい よい	あまり 十分でない	不十分	よい	だいたい よい	あまり 十分でない	不十分	よい	だいたい よい	あまり 十分でない	不十分
平成21年度	334	49.4	46.2	4.3	0.0	58.9	36.6	3.8	0.7	61.7	33.0	5.2	0.1
平成22年度	100	51.0	42.6	6.4	0.0	58.5	39.6	1.9	0.0	67.7	31.5	0.8	0.0
平成23年度	271	51.2	45.4	3.4	0.0	67.2	31.3	1.5	0.0	68.8	30.1	0.8	0.2
平成24年度	144	56.3	43.0	0.7	0.0	65.6	31.0	3.4	0.0	66.0	32.7	1.4	0.0
平成25年度	93	72.7	27.3	0.0	0.0	75.6	24.4	0.0	0.0	80.2	19.8	0.0	0.0
平成26年度	72	63.2	35.0	1.8	0.0	67.4	29.6	3.0	0.0	64.8	35.2	0.0	0.0

雑駁にまとめれば、いずれの年度も全ての項目に亘り受講者の満足度は極めて高かったと結論付けることができる。今年度についても本講習の意義や価値を高く評価していただいているが、これは、新任教頭研修の一環で、ファシリテーターとして協力いただいた新任教頭の温かい支援があったためでもある。改めて感謝の意を表したいが、同時にまた、両者の真摯な学びから私たち担当者が勇気づけられているのも事実である。以下は、今年度の講習受講後のアンケートで記述された参加者からの主なメッセージの抜粋である。

<受講者>

- ① 多くの素晴らしい実践記録を読んで今後の自分の指導に活かせるヒントをたくさんいただいた。また、自分のこれまでの経験を振り返ることができ、大変学ぶことの多い講習であった。
- ② 自分自身を振り返る場となり、今後の自分の在りかたを問い直すことができました。今、教育を巡る様々な状況や動向を知ることができとても貴重に思いました。
- ③ 教員がお互いに学び合う場を大切に設定するのは、福井県の教員の力を基本的に信じておられるということなのでしょうね。確かに、実践している教員からの言葉は何よりも説得力があります。
- ④ 校種や職種、教科、年齢等の違う方と自分の実践を語り合ったり、関心を持った実践記録を紹介し合ったりすることで、いろいろな価値観や体験を聴くことができ普段は味わえない体験ができた。
- ⑤ いろいろな噂に惑わされて受講しましたがとんでもなかったです。とても有意義な時間を頂きました。

た。まだまだ受講したいです。そして何より全ての事が繋がっていることに驚きました。

<ファシリテーター(新任教頭)>

- ① いろいろな先生と話が出来たことが一番の収穫です。話し合いを進めていく立場は根気よく聞くことができないといけなさと感じました。その中で話し方のうまい人はやはり聞きやすく、教員にとって話し方のうまさは大切だと感じました。
- ② 職場では、日々いくつもの相談事や悩み事、問題点を教職員から聞くことがある。限られた時間内ではあるが、しっかり相手に向かい合い共感しながら話を聴くということは今後大いに役立つと考える。
- ③ 自分自身、このような役目に向いてないと思いますので、なかなかしんどかったです。でも、教頭職はいろいろな先生方の悩み、相談を受けることも多いです。会議の場で発言を求められることも多々あります。今回の研修で行ったことや異校種の先生方の話された内容等を思い出して職務に当たっていきたい。
- ④ とても有意義な研修であった。もっともっと研修したいと思った。特に、全く考え方の異なる人同士の議論をファシリテートする役割について学びたいし、力量を高めていきたい。
- ⑤ ファシリテーターという役を2日間にわたってさせていただいて「包括する」「促進する」という意味を体全体で学んだ気がする。この学びを今後の教頭の職務に活かしたい。

これらを見る限り、本講習のねらいや目的は十分に達成されていると理解できるが、一方で、懸念される課題が次第にクローズアップされてきたのも事実である。

最も深刻なものは、先述したとおり、「教育実践と教育改革Ⅰ」と「教育実践と教育改革Ⅱ」ともに、年々受講者数が減少の一途を辿っていることである。毎年度の受講対象者数に余り変化がないことを考えれば、この受講率の低下は由々しき課題である。受講対象者が他のどのような教育機関でこの更新講習を受講しているのかの具体的な調査・分析が必要なのは言うまでもないが、前述の〈受講者〉の⑤の記述にもあるように、講習に係る魅力を発信する方法論に課題があるようにも思う。更新講習を受ける入口のところで二の足を踏まれているのが誠に残念でならない。課題解決に向けた対策が急務であるが、これには、近い将来、国の方で予定されている更新講習見直しの動きと呼応した総合的な検討・研究が必要不可欠であろう。

この点に関して述べると、平成26年10月2日付けの文部科学省通知によって、教員免許状更新講習は新たな局面を迎えることとなった。これは、現在の講習の内容について見直しを行い新たに「選択必修領域」を追加、平成28年4月より実施するというものである。具体的には、現行の必修領域の中に位置づけられている、「教職についての省察並びに子どもの変化、教育政策の動向及び学校の内外における連携協力についての理解に関する事項」の8項目の中から、「学校を巡る近年の状況の変化」「学習指導要領の改定の動向等」「法令改正及び国の審議会の状況等」等5項目を新たに設定した選択必修領域の中に移行し、必修領域は、これらの内容から抽出して構成される新項目「国の教育政策や世界の教育の動向」及び残った「教員としての子ども観、教育観等についての省察」等3項目から構成される6時間の講習としたのである。一方、6時間として枠付けられる選択必修領域は、現代的な教育課題として、教育相談（いじめ・不登校への対応を含む。）等7項目が、上述の5項目に付加されることとなった。

これは、改正前の必修領域の内容が広範囲に亘って

いたことと全受講者が共通して受講するため、受講者の希望やニーズに合致しづらいことなどの指摘を踏まえ内容を精選したためである。また、これに併せ、現代的な教育課題に対応するため、学校種や免許種等に応じた講習が提供される必要があることから6時間の選択必修領域が新たに設置されたということである。

本学の教員免許状更新講習運営委員会では、こうした状況に対応するためワーキングチームを発足させ検討を始めたところである。これまでの協議の中で共有されている考え方は、現在の「教育実践と教育改革Ⅰ」と「教育実践と教育改革Ⅱ」について、そのコンセプトである省察的实践を重視した心棒までも変える必要はないのではないかとということであるが、今後更なる研究と検討が必要となろう。

しかしながら、残された大きな課題が2点ある。1つは評価の問題である。現行の場合、必修領域の2日目には、1日目に読み進めた他者の優れた実践記録をまとめたレポート（小論文）を評価のエビデンスとして提出いただいているが、必修領域が1日目のみとなればどういう形で受講者の評価をしていくか工夫が必要となる。1日目に位置付けられている講義を制限してその分レポート作成を前倒しするか、あるいは1日目に実践記録の読後メモを作成していただきそれをもって新しい必修領域の評価とするか、あるいはまた他に妙案があるのか、難しい問題ではある。

今ひとつの課題は、今回の見直しを受講者数の減少に拍車をかけるようなことになってはいけないということである。過去の受講者からの極めて高い本講習への評価に報いるためにも、不転の決意で問題解決に向けた熟議を重ねなければならない。広報と発信の在り方が重要なキャスティングボードを握ることになるが、県内で開催される様々な教員研修、教育研究大会等に赴き、今般の見直しに係る本学の更新講習の内容周知に併せたプロパガンダを精力的に展開する必要もあろう。21世紀の教師教育改革の具体的な実践のひとつでもある本学教員免許状更新講習（必修領域）の実施運営に関して、関係各位の英知、覚悟、結束力、協働性を結集するときに改めて到来したとも言えよう。

〈March 27, 2015〉

## スタッフ退任のご挨拶

福井大学教職大学院 特命助教

藤井 佑介

2015年3月31日をもちまして、福井大学教職大学院を退任することになりました。2年間という短い期間ではありましたが、教職大学院スタッフや院生をはじめとする関係各位の方々には大変お世話になりました。この場を借りて感謝の意を表させていただきます。本当にありがとうございました。

2年前に特命助教という立場で着任をし、当初は真新しい言葉ばかりで右も左もわからない状況ではありましたが、いつのまにか福井大学教職大学院の文化や哲学に浸っていき、魅了されてきたように思います。

私の場合は授業研究を中心に研究を進めてきたという背景もあり、教育現場との協働ということに関しては心得ていたつもりでありましたが、福井へ来てからはそこに長期的な視野を持つ必然性が加わりました。一つの授業を分析することには研究として意味はありますが、教師の成長や組織の展開を考えた際には、その積み重ねと省察、再構成が重要であるということ福井で実感することができました。自分の中ではパラダイム転換が起こったような感覚も持っています。福井大学教職大学院という組織に正統的の周辺参加ができて

きたのかは定かではありませんが、私自身の学習観や組織の捉え方に関する変容は確かなものとして残っております。教職大学院では何かを注入されて覚えていくのではなく、人との多様な関わりの中で、次第に重要な観点を意識づけられてきたことが多かったように思います。その分、福井では多くの人と出会うことができ、とても濃厚な2年間を過ごすことができました。新しい世界や視点を示してくれる研究者の方々、悩みながらもすばらしい実践をされている現場の先生方、大きな志を持ってこれから教員となっていく若手院生、すべての出会いが私にとっては一生の宝物です。

4月からは長崎大学教育学研究科（教職大学院）へ准教授として赴任いたします。同じ教職大学院ですが、今度は身分も違うし、カリキュラムも違います。しかし、教師教育への想いなど根底に流れるものは福

井も長崎も同じだと思っております。今後は福井で経験し、実感したことを礎としながら長崎の教育の発展に貢献していきたいと考えております。もちろん、福井とのさらなる連携を図ることで分散型コミュニティを形成していけたらとも考えております。福井を離れることにはなりますが、合同カンファやラウンドテーブルには参加し、教職大学院をはじめとする教育機関に関わっていく予定ですので、福井の方々には「今後ともお世話になります！」という形で結びにさせていただきます。

13階のあたたかな同僚に囲まれた研究室より



## 兼任終了のご挨拶

福井大学教職大学院 特命准教授

山野下 とよ子

この度、2年間の兼任の任を終え、教育地域科学部の理数教育数学科の方へもどることになりました。短い期間ではありましたが、教職大学院のスタッフの方々、院生の皆様、関係各位の皆様には本当にお世話になりました。心から御礼申し上げます。

教職大学院のことを何もわからず飛び込み、初めはとまどうことばかりでしたが、だんだんと学校拠点方式や長期インターンシップのことが理解できるようになり、院生さんたちの学びの姿を見聞きすることが楽しくなってきたことをなつかしく思い出します。

2年間を振り返っていくつか印象深いことがあります。その1つは、巨田先生が最後のカンファレンスで話されたことと同じ思いを私も抱いてきました。それは自分が隣の石川県金沢市で小学校の教員としてやってきたことをいろいろの場で思い出し、それを意味づけることができたことです。「あの時同学年の教師たちと一緒に取り組んだこと」や、「研究部で見通しがあったわけではなかったが、仮説を作って全校の研究としていったことはこんな意味や価値があったことだったのだ」とか、それと同時に「もっとこうしたら良かったのでは」などと過ぎ去った実践と何度も何度も向き合わされました。カンファレンスや集中講義の場での院生さんたちとの出会いと語りがあったからこそです。

2つ目に附属小学校、中学校をはじめ、拠点校や連携校の授業をたくさん参観させてもらったことです。専門の算数・数学だけでなく多様な教科・道徳などの授業もありました。私は子どもたちの生き生きと学ぶ姿をみるのが大好きで、子どもと一緒に困ったり喜んだりする時間が心地よかったです。欲を言うと、具体的、個別的な実践課題から子ども観や普遍的課題に視野が広がるような取り組みをもっとやりたかったな

という思いもありますが、参観させていただいたことにとっても感謝しています。

3つ目に年2回の「福井ラウンド（実践し省察するコミュニティ）」のゾーンD「授業改革の扉を開く」に取り組みさせてもらったことです。ゾーンD担当のスタッフで「授業改革とはなんぞや」を喧々諤諤と言い合ったことがとても励みになりました。その中で「授業者は冒険家であるべきか」「問いはどこから生まれるのか」「質の高い学びを生む問いとは？」「教師は授業sで何を残したいのか？」をテーマに各回ごとに全国あちこちからの授業実践の提案や発表、そして討議があり、大変充実した学びができました。

4月からも同じ大学にいますのでお会いする機会もあるでしょうし、ラウンドなどには参加したいと思っています。今後とも教職大学院がますます日本の教育の発展に寄与されることを願っています。



# 実践研究 福井ラウンドテーブル特集 2015 spring sessions

実践し  
省察する  
コミュニティ  
Round Tables:  
Spring Sessions 2015  
for Reflective Practice  
and Organizational Learning  
in University of Fukui  
For Communities of Practice and Reflection, since 2001

## Session 0

### 知識社会の教師の資本

Teacher Professional Capital in Knowledge Society

## Session 0 「知識社会の教師の資本」

福井大学教職大学院 准教授 木村 優

2015年2月28日（土）10:30-12:00に実践研究福井ラウンドテーブルSession 0として、「知識社会の教師の資本」と題したシンポジウムを開催した。本シンポジウムには、ボストン・カレッジ教授のアンディ・ハーグリーブス氏を招聘し、ハーグリーブス氏から「知識社会の学校と教師」と「専門職の資本」を交えた基調講演が行われた。そして、この基調講演を受けて、学習院大学教授の佐藤学氏と東京大学大学院教授の秋田喜代美氏からレスポンスとコメントをいただいた。ハーグリーブス氏の先鋭で洗練された講演は日本の教育改革の方向定位にかかわる示唆に富み、佐藤氏と秋田氏によるレスポンスとコメントは「知識社会の学校と教師」への温かなエールに溢れ、さらに、400名を超す多数の参加者に恵まれことから、本シンポジウムは福井大学教職大学院及び日本の教育改革にとって一つのエポック・メイキングになったと思われる。

本シンポジウムでハーグリーブス氏が紹介した「専門職の資本」（図：専門職の資本の公式）について簡潔に紹介しておこう。

専門職である教師にとって必要な資本（投機可能な関連資産）には以下の3つがある。

- 人的資本：資質・知識・心構え・技術・情動知性
- 社会関係資本：信頼・協働・集団としての責任・相互扶助・専門職のネットワーク
- 意思決定資本：判断・事例の経験・実践・挑戦と伸張・省察



これまでの教員養成・教師教育においては「人的資本」の育成が強調されてきた。しかし、知識社会に備える教師、そして知識社会の教師には「人的資本」と同じくらい「社会関係資本」が必須となる。これは、教育にかかわる技術が洗練され、困難化する現在において、教師が専門職集団として物事を遂行し、責任を共有する等のチームワークやグループワークの必要性を示すものでもある。しかし、知識社会を乗り越える教師には「人的資本」と「社会関係資本」を個人でも集団でも培うだけでは不十分である。時事刻々と変化する状況下で、教師は自らの知識や経験や社会関係を基盤として、瞬間的に適切な行動を判断し、同僚間で学び合いながら「学び続けていく」専門職である。ゆ

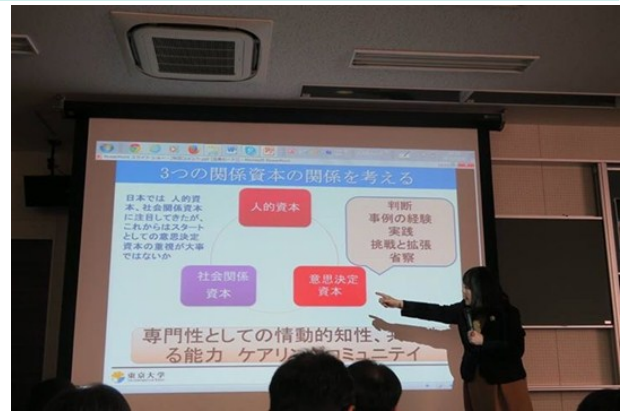
専門職の資本 (Professional Capital) の公式

$$PC = f( HC, SC, DC )$$



えに、知識社会を乗り越える教師は、まさに「省察的実践家」としての「意思決定資本」を豊かに育てていく必要がある。

本シンポジウムでは、ハーグリーブス氏の提言を受けた秋田氏が「人的資本がなければ社会関係資本や意思決定資本が育たないといった、資本の順序的獲得という誤解を避けることが大切である」と大事な示唆を与えてくださった。すなわち、「人的資本」と「社会関係資本」と「意思決定資本」は相互作用するものであり、特に「社会関係資本」と「意思決定資本」は「人的資本」を培い得る大きな「資本」ということである。



## Session 0に参加して

富士市教育委員会（静岡県富士市立高等学校）指導主事 眺野 大輔

2月28日は、特別な雰囲気但至少でも間近で感じようと、9時過ぎには受付を済ませ、整理券を受け取った。座席番号は7番、絶好の場所でアンディー・ハーグリーブス先生の特別講義を聴けることになった。その後、少し会場を離れて興奮を冷まし、開始15分ほど前に再び座席に着いた。会場内はすでに多くの聴衆で埋め尽くされ、これから始まる特別な時間への期待感に満ちていた。同時通訳の機器のチェックが始まった。いよいよだ。

ハーグリーブス先生は、ユーモアに富んだ日本でのエピソードで会場の緊張感を一気にほぐし、iPadで会場を逆撮影する頃には会場は一体感に包まれていた。時折見せるいたずらっぽい笑顔に油断し、心が開いていったのだろう。本題に入る頃には、私を含め会場全体がグッと話に引き込まれていた。ふと我に返り、そんな自分に気付いて冷静になったその頃に、ひとつの単語が飛び込んでくる。“Decisional Capital”，この言葉に引っ掛かる。その後は、話が思うように頭に入らない。それまでの話の中で”Professional Capital “として、”Human Capital “や”Social Capital “の重要性は、自分でも実感できるものだった。しかし”Decisional Capital “，“意思決定”と”資本”は、思っても見ない組み合わせだった。こんなことに気を取られているうちに、先生の特別講義は終わった。



その後も、午後のセッション、翌日のラウンドテーブルと、とても充実した時間を過ごしていたのだが、

ふと気が付くと“Decisional Capital”について考えていた。しかし、このようにひとつのキーワードへの引っ掛かりが持続すること自体は、とても面白いことだ。何か重要なことを言っている。でも、自分の中にある具体的なイメージと結び付けられない。これまでは自分にはない新たな概念が飛び込んできたということだ。ラウンドテーブル終了後も、このことが頭から離れず、何度も考えては、具体的なイメージにならないまま頭の隅に戻すことを繰り返していた。すぐに答えが得られる手応えはなかったが、久しぶりの感覚を楽しんでいた。

そんなとき、1通のメールが届き、ニュースレターでセッション0に参加した感想を書くことになった。そうなる、頭の中で飼っていた“Decisional Capital”を放ってはおけない。何とか自分なりのイメージをはっきりさせたいと、インターネットで先生の講演録やインタビューなどの記事を探してはプリントアウトし、ヒントを探し続けた。

そんなことを続けるうち、頭の中で様々なものがパツと繋がった。「変化が激しく、知識が次々に更新され、価値観も変化し続ける知識社会では、その状況に沿って意思決定できること自体の価値が非常に高いのだ」ということに気付いた瞬間だった。言葉にすると、大したことはない。しかし、私自身の「意思決定」という言葉のイメージが塗り変わった感覚だ。それまでの「意思決定」という言葉の印象は、堅く、マニュアル的で、一部の権限を持った人が行う行為だという感覚だったように思う。これからの知識社会ではそうはいかない。全ての人が誰かに委ねることなく、自らが「意思決定」することが求められる。そう考えれば、やはり、刻々と変化する状況下で、その場に適した「意思決定」ができることは、専門職としての価値を大きく左右する「資本」なのだ。

“Decisional Capital”は、状況の異なる場面での実践を積み重ね、そこで導きだしたエッセンスを、次の実践に活かすサイクルでの「意思決定」の経験として高められていく。さらに、それを専門職のコミュニティにおいて共有し、自分の経験ではない様々な「意思決定」の状況を分析し、自らの実践に活かすことで一層研ぎすまされていく。そこで繰り返される「意思決定」とは、分岐点でいくつかの選択肢から一つを選

ぶようなものではなく、次の実践と省察のサイクルをデザインするようなものかもしれない。

この“Decisional Capital”は、専門職だけに求められるものではなく、これからの知識社会における市民としても、欠かせないものになるだろう。このような社会で生きる生徒に対する教育は、明らかに20世紀のそれとは違う。将来、知識社会の市民となる生徒の学びは、単なる情報や技術を得るだけではなく、専門職が“Decisional Capital”を獲得してきた実践と省察のサイクルに沿ったものでなければならないはずだ。そこでは、これからの社会での成功を左右する「学ぶ能力」を育成することになる。そのとき、専門職として重要な要素である“Decisional Capital”は、彼らの学びをデザインする上で、重要な枠組みを提供することにも繋がっていく。教師は、専門職であり続けるために学び続けることが求められるということだ。

まさに、教師に求められる仕事は変化している。



## Session I – III

Knowledge Fair/Symposiums/Forums

### Zone A 学校

#### 子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり

## 学校を越えて語り合い、学び合うコミュニティへ ～Zone AのSessionの概要～

福井大学教職大学院 准教授 岸野 麻衣

Zone Aでは「学校」における「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」をテーマに考えてきました。なかでも今回は特に「子どものこと、教師のことを語り合える組織づくり」に焦点を当てました。

Session Iのポスターセッションでは、福井県内外の学校から、それぞれの学校でどのように学校づくりに取り組んでいるか、報告いただきました。福井県の中学校・高等学校からは生徒のみなさんにも報告いただき、子どもも教師も共に学び合う姿が印象的でした。

Session IIのシンポジウムでは、長野県中野市立中野小学校の武居和紀研究主任、福井県福井市至民中学校の鈴木三千弥研究主任、金沢大学附属高等学校の風間重利副校長から話題提供をいただき、東京大学の秋田喜代美教授からコメントいただきました。武居先生からは、研究のための研究でなく日常の授業改善に向けて、「心を寄せたい子」を中心に研究を深め、互い



に授業を見合い、子どもの姿を語り合って、教師が学習観や授業観を転換させていく過程を、具体的な事例をもとにお話しいただきました。鈴木先生からは、日常的に授業について語り合う場を大事にしつつ、見



合った授業について参観記録を交換する取組や、生徒のくらしにかかわる多角的な切り口で校内研修を充実させる実践が報告され、教師同士が支え合う文化を作っていることをお話いただきました。風間先生からは、学校のこれまで抱えてきた課題を赤裸々にお話いただきながら、教科の徒弟的な枠組みに囚われず、世代を超えて教師たちがチームになって、学校改善といういわば教師の「総合的な学習」に取り組んでいった過程が語られ、学校がみんなのものになるようにつながりながら、動きを活性化させていることをお話いただきました。これらを踏まえて、秋田先生からはそれぞれの学校の実践を整理しながら、生徒の出来事と育ち、出来事の展開とつながり、環境の構成と再構成について、短期的・長期的な観点でいかに目に見えるようにしていくか、語り合ったり書いたりして目に見えてくることで教師の仕事の手ごたえや楽しさにつながっていくのではないかと、授業研究会の持ち方やビデオや写真の活用についても多くの学校で検討の余地が

あるのではないかとお話しいただきました。

シンポジウムではそれぞれ魅力溢れる語り引き込まれ、コーディネータとしてはまとめきれずこの場を借りてお詫びしたいところですが、「組織づくり」というときに、単に研究会のやり方等の形式的な答えを求めると「支え合う」ことができるのか、協働で探究していくことが大事だと改めて考えさせられました。きっと参加者の方々も、どうしてそんなことができるのだろうか、自分の学校はどうかかと考えを巡らせたことと思います。

Session IIIでは、参加者の考えたこと、自分の学校での取組や課題について、5人程度のグループに分かれて語り合いました。部屋を移動して、最初こそ戸惑う様子も見られましたが、語り始めるとどのグループも熱気を帯び、学校を越えて語り合い、学び合うコミュニティが展開していったようで、企画者の一人として大変うれしく思いました。

## 次につながる実践への学び ～Zone AのSession IIIでの語り合いから～

福井大学教職大学院 非常勤講師 松井 富美恵

予定より20分遅れで始まったSession IIIは、今回は参加者の増加により5つの講義室に分かれて行いました。今回は、昨年までと異なりこのSessionでの提案報告はなく、それまでに行われた2つのセッション、ポスター発表やシンポジウムの内容を受けて小グループで語り合う形でしたが、あっという間に過ぎた1時間20分でした。午前中のSession IIを含め、午後からのI、IIと進行するにつれてわき上がってきた熱気のようなものが、そのままSession IIIに持ち込まれたように思います。そのためか、自己紹介が済むと、どのグループも以前からの知り合いのような和気藹々とした雰囲気、活発な語り合いがされていました。

私が担当したグループは、W県教育センターのU指導主事、S県高校のN先生、T県高校のY先生そして地元福井のO小学校校長T先生で、立場も校種も様々な5名のグループでした。T校長先生は名簿には載ってないのですが、どうしてもと参加して下さったとのことでした。まずU先生から、前年までの学校で教務主任として取り組もうとした行事等カリキュラムの精選が難しいという話がありました。各参加者が聴き合い自身の学校のことを語り合ううちに共感の声とともに、何らかの改革を進めようとする時のベテラン教員の考えと若手の育成・活躍とのギャップの話題になりました。「若い教員が活躍できるようにと話し合いの時のグループ分けの工夫をした」「若い教員を大事にしたいと思っていて、今日はヒントがほしいと思って参加した。秋田先生の話に興味を持った。もっと資料がほしい」「ベテランの先生は難しいところがあり皆のやる気をどう引き出すか悩む」「(ベテランは)築いた自分の枠を壊されるのをいやがり、なかなか踏み込めない」「(研究主任として)ICTを活用し、協働学習を取り入れ改革に取り組もうとしたがなかなか

か関心を持ってもらえない。底辺層の生徒の学力を伸ばそうとしてきた。」等、関連しながら組織づくりの難しさや悩みがたくさん出てきました。さらに進み、「(教員に)危機感がないと改革はなかなかできない。議論だけでは難しい。」「校内で信頼し、相談できる人を持つこと」「仕組みを作ってもまもなくゆるんでしまう。防ぐ仕組みが幾重にも必要であろう。」「地域の人に入ってもらうようにした。」「授業を見合うことに取り組み、少しずつ進んできたが・・・」等踏み込んだ話になっていきました。グループ内はミドルリーダー級の教員が多いこともあり、マンネリ化を防ぐことが大事、各教員の意識改革が必要、そのために仕掛けをつくろう、等々のヒントや手がかりを得られ、次につながる実践への学びになったのではないかと、参加者それぞれの表情からも感じられました。また、佐藤学先生や秋田喜代美先生の話がそれまでのセッションを受け何回も引用されていたことが、私には印象に残りました。

時間になり終了の合図をしても話し合いが弾んで、なかなか終われないグループがあり、とうとう声を掛けました。同様に、どの部屋でも一歩踏み込んだ学び合いがあったのではないのでしょうか。今回は、一段と参加者の意識と意欲の高さが感じられたSessionでした。



## Zone B 教師教育

### 21世紀の教師教育をイノベーションする

学校を基盤とした教員養成と教員研修のあり方

## 教師はどこで、どのようにして育つのか ～学校を基盤とした教員研修の充実を～

福井県東京事務所 兼 福井県教育庁高校教育課 指導主事 渡邊 久暢

我々教師はどこで、どのようにして育つのか。佐藤学氏はSession IIにおいて「教師の学ぶ場は教室を中心に同心円的構造でなければいけない。」と述べ、教室・学校を基盤とした教員研修の重要性を指摘した。同じ教室で授業を展開する同学年の同僚や、隣の教室で授業を展開する同一教科の同僚から受ける様々なアドバイスが、一番有効だという。もちろん、学校内部のメンバーで研修を行うだけでなく、研究者の方々や、各県の教育研究所所員の方々はその学校に出向き、様々な角度から「その学校の事例にマッチした指導や助言」を行うことも教員一人一人の学びにつながる。福井県・長野県の両教育長も「訪問研修」の重要性を指摘されたが、今後ますます教室・学校を基盤とした教員研修の充実が求められていると言えよう。

鈴木寛氏が御指摘のとおり、どの学校にも当てはまる「正解」は教育活動にも教員研修にも存在せず、ただあるのは「個別暫定解」のみである。教員研修の在り方については特に、その学校の児童・生徒の状況をふまえた上で行うことが求められる。セッションIIIでは、その具体的な営みについて福井県教育研究所・静岡県教育センター、長崎県教育センターの方々から学ばせていただいた。

私自身は平成25年度の1年間、東京事務所を拠点として首都圏の中学・高校をのべ80回以上訪問してきた。拝見したクラスにおいて大変すばらしい授業を展開される方は数多くいらっしゃった。しかし、ふと隣のクラスを見ると・・・という状況も多くあり、授業

改善の取り組み等の教員研修を組織的に行うことの重要性を痛感させられた。しかし、福井県内の学校でも校内研修の充実化はどんどん進んでいるときく。若狭高校では、24年度よりSSH・研究部が主体となり、学校をあげての授業改善を目指した校内研修プログラムを立ち上げ実施しており、25年度は全ての教科による公開研究授業日を設定し、授業後の研究協議も教科ごとに様々な大学や福井県教育研究所等から指導助言者を招き実施したという。また「アクティブラーニング」の実践者として有名な産能大小林教授や岩手県立盛岡第三高校の下町教頭などを招いたり、学力評価に詳しい大阪教育大学の八田准教授を招いての「資質・能力の指導と評価」についての研修を行ったりするなど、学校を基盤とした教員研修を充実させた。自校の生徒に対してどのような授業を展開すると良いのか、という「個別暫定解」を模索するような教員研修を積み重ねているといえる。教員対象のアンケート結果からは、教員一人一人が授業改善意識を高めていることが読み取れるという。

新しい学習指導要領の検討が開始され、高大接続改革も急ピッチで進む中、教員の資質・能力の更なる向上は急務だと言えよう。今回のZone Bへの参加を通して、学校を基盤とする教員研修の在り方について大きな示唆を頂いた。教育研究所や教職大学院との連携による校内研修の充実策について、更に考えていきたい。

## 21世紀の教師教育をイノベーションする -学校を基盤とした教員養成と教員研修の在り方-

鹿児島大学教育学部 准教授 廣瀬 真琴

「日本の教師教育は25年遅れている」とは、登壇者佐藤学氏の発言である。Zone Bではその遅れ、すなわち教職の高度化を巡り、行政（福井県教育長林氏と長野県教育長伊藤氏）と文部科学省（文部科学省参与鈴木氏）、教育学者（学習院大学佐藤氏）とが、対談を繰り広げた。私見では、今対談の成果は、各教師の専門職としての成長を持続的に支援・推進するシステム

構築の必要性について、上記の主体間で共通理解が進んだ点にある。

行政からは、知識伝達型からの脱却を色濃くし、研修を多様化（派遣研修や学校へ出向く研修等）している動向が報告された。佐藤氏は、その動向の展望を示した。それは、研修を提供するという考えから、教室・学校から同心円的に広がる教師の学びの空間を舞

台に、自らの成長を持続的に推進する教師をどのように育成・支援するかという発想へのシフトである。また、鈴木氏が示した教師像もこの見解に符合した。氏の発言主旨は、知識基盤社会に生きる子どもや保護者等の観点から考えるに、耐教師性カリキュラムの開発ではなく、耐カリキュラム性教師（curriculum proof

teacher)の養成が希求される時代へ突入しているという点にあった。これは提供される研修だけで実現されない教師像であり、教師教育に携わる者が先の発想に立ち共同する必要性について、衆目の一致をみたZoneであった。

## Zone Bに参加して

鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター 准教授 内 健史

今回のラウンドテーブルにおけるフォーラムで、話題提供機関として本学部のモデルカリキュラムの研究実践を発表する機会を得た。このフォーラムは、参加メンバーが実践者や研究者として互いの実践とそこでの思考をじっくりと聴き取り、学び合う場であることと、「21世紀の教師教育をイノベーションする：学校を基盤とした教員養成と

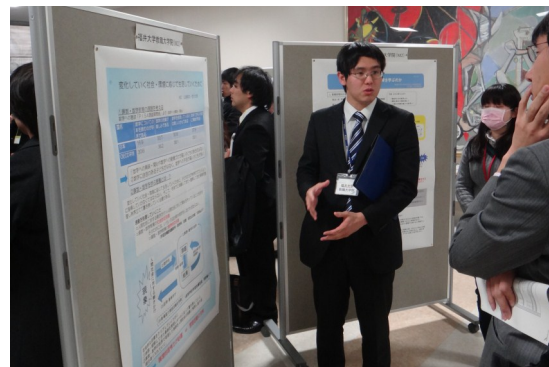
教員研修のあり方」というテーマが県教育委員会から人事交流で大学に実務家教員として派遣されている自分にとって重要なものであるということから、大変貴重な場となった。

自分たちのグループは、福井大学教職大学院の先生のコーディネートのもと、福井県内からは教育事務所長、特別支援学校校長、私立大学教員、県外からは静岡県立学校教諭の方々と多様なメンバーが各々の実践やそこでの思い、考えを持ち寄り議論した。話題提供では、福井教育事務所嶺南教育事務所について、福井県唯一の教育事務所として県の出先機関としての役割と指導主事を配置していない2市4町の指導主事も担っていること、教育事務所に内地留学している研究員と事務所の研究主事の一部のメンバーも教職大学院の院生として学んでいること、教職大学院教員がチームを

組んで院生の学校現場における実践研究を支援する高度な専門的支援との相乗効果で学校支援の充実が目指されていること等を興味深く伺った。さらに、本学部の教員研修モデルカリキュラムに関する話題提供ではピア・サポート型研修やWebを活用した交流等について説明し、県総合教育センターや市町村教委との連携のあり方、離島へき地を多く抱える鹿児島県におけるテレビ会議の必要性、ピア・サポート型研修の具体的な進め方等についての質問や、時間をかけずに継続して振り返りを蓄積するようなファイルの工夫やICT端末を活用した研修ネットワークづくり、研修に主体的に取り組まない教員への働きかけの重要性等について貴重な意見をいただくことができた。

この他にも私立大学における教員養成、特別支援教育コーディネーターの研修、高等学校におけるICTの活用など多種多様な話題について、実践者としての立場から自由な雰囲気での情報交換がなされた。それぞれの地域や学校の実態、教員のニーズに応じて多様な研修や教員養成の形や工夫、課題があることを実感できたことで、自分たちの取組みを客観的に見つめ直し、これからの教員養成・研修のあり方を考え直す意義深い時間であった。

福井大学教職大学院によるZone Bでのポスターセッション発表



Zone B / Session III フォーラム 特別企画

## アジア型教師像と教師教育の探究 —上海師範大学の研究と実践から学ぶ—

### Zone B 「東アジア型教師像と教師教育の探究 —上海師範大学の研究と実践から学ぶ—」 報告

福井大学教職大学院 教授 森 透

今回初めてZone Bの中に、「Session IIIフォーラム 特別企画」として中国の教師教育のセッションを設けることが出来た。今回のフォーラムを準備した関係で、私が全体の報告をし、フォーラムに参加された足羽高校の片桐哲也先生に感想をお願いした。

今回のフォーラムは、「東アジア型教師像と教師教育の探究—上海師範大学の研究と実践から学ぶ—」をテーマとして、2月28日（土）16時から18時までの2時間、コラボレーションホールで開催された。報告者は、①上海師範大学の教師教育の現状と課題（陸建非）、②上海師範大学天華学院の教師教育の現状と課題（郭偉奇）、③上海市教育委員会の取り組み（張進）、④首都師範大学の紹介（夏鵬翔）、⑤上海師範大学附属第一小学校での美術授業実践（濱口由美・大橋武史）の5本となり、ゲストの佐藤学氏（学習院大学）のコメントもありで2時間では足りなかった。今回のフォーラムが実現した背景として、2013年3月、2014年3月、そして2014年12月の3回、上海師範大学を訪問し交流を深めてきたこと、そして2005年7月に「学術交流に関する協定」を締結し、さらに2014年3月に協定を継続したことがあげられる。今までも教職大学院の教員だけではなく、現職院生や学部卒院生も同伴して訪問してきたが、更に本格的に「教師教育」について深く学術交流を行いたいと考えて、今回のフォーラムが実現したのである。当日の参加者は約20名であったが、林福井県教育長・三田村企画官等の県教委の方々や寺岡副学長、足羽高校の片桐教諭等が参加され、内容的には大変充実したフォーラムとなったことに感謝したい。なお、中国語の通訳は上海師範大学国際処の乔易安氏をお願いした。

①陸建非氏は、1. 世界における教師教育の背景、2. 優秀な教員の訓練計画、3. 本学の教師教育改革の基本状況、の3点についての報告であった。2010年に定めた中国の「国家中長期教育発展・改革計画要綱（2010～2020年）」には、「教育の大計は教員が本である。優れた教員があるからこそいい教育があるのだ」とある。上海師範大学の教師教育のカリキュラム改革としては、①現行の教師教育の公共課程の改革として、子どもの発展と学習、教育基礎及び心理健康と道徳教育という3つの学習領域をめぐって、カリキュラムのモデルをそれぞれ設計していること、②教師教育の技能訓練と教師素養の開拓を強化すること、③学科基礎を強固にすること、④師範教育類の公共基礎課程を調整すること、がある。さらに、教育実習の改革（18週間への延長と実習基地の建設強化）、及び教師陣の質の向上、教育の国際化の推進等の取組みが紹介された。



②郭偉奇氏は、2005年4月に創立された私立大学である上海師範大学天華学院の紹介をされ、工学・管理学・文学・教育学・理学と芸術学の6学問分野と25専攻があること、特に、幼児教育・小学校教育・芸術教育・応用心理学・中国語教育・日本語の専攻が教師教育に関係があると考えられる。さらに、若手教員の訓練に力を入れており、2014年9月までの64人の中層管理職のうち14人が40歳以下で22%を占めていること、若い幹部は各学部の副学部長などを担いし教学管理、行政管理などを兼任して、それぞれの部門の中で中堅となっていることが報告された。さらに、2020年までに50人の専任管理核心チーム、150人の優秀専任教員及び30人ぐらいの目玉職員を養成する計画で、2010年には修士学位を持っている若手教員を35人アメリカのパシフィック大学へ派遣したとのことである。

③張進氏は、上海市教育委員会の紹介をされ、就学前教育、小中義務教育、高校などの初中等教育、大学



教育、職業技術教育及び成人教育、上海教育の全般を助言、指導、管轄という任務があるが、上海には直接小中高校を管轄する区県教育局があるため、上海市教育委員会は大学教育の政策指導をメインにしているとのことである。教育制度は基本的に小学校5年、中学校4年、高校3年であり、2004年から全面的に5、4、3制度を上海市範囲で実施するようになった。義務教育は日本と同じ9年間であり、高等教育機関数は国立10校、公立37校、私立21校である。教員研修制度には様々な研修プログラムがあり、自主研修、学校でのグループ研修、教育学院（区レベルの教員研修施設）から師範系大学（華東師範大学、上海師範大学）での研修活動などがある。最後にPISA調査がトップクラスであることで、生徒達と教師達にとって貴重な経験となったことが報告された。

④夏鵬翔氏は北京市にある首都師範大学初等教育学院の紹介をされた。1954年に創立され1992年に改名、北京市教育委員会に所属、学部（学院）は25、専攻は55、修士課程・博士課程があること。養成目標は「小学校教育事業を愛する。児童生徒を理解し、それを本とする。小学校教育の意義を認識し、教師道徳を先頭とする。教師としての専門性を発展させ、教科を通して人を育て、生涯学習を続ける」とある。教育実習は3年次が5月に4週間（郊外の小学校）、4年次が10月に6週間（市内の小学校）である。

次に、佐藤学氏が感想とコメントを述べられ、最後に⑤濱口由美氏と大橋武史氏が、上海師範大学附属第一小学校で行った美術授業の紹介をされた。それは、

2014年12月22-25日に上海を訪問したときに、附属第一小学校で福井大学の美術コースの学生が授業にチャレンジをした報告であった。福井大学附属小学校の教諭である大橋氏が担任をしている附属小の子どもたちの絵画を上海に持参し、それを上海の子どもたちが見て共感・感動して非常に盛り上がった授業となった。学生と子どもたち、また私たちは「言葉の壁」を超えて、美術の授業は可能であるということの発見があった（詳しくは「ニュースレター第70号」（2015.02.28）を参照のこと）。

以上、時間的に厳しく、報告者6名、及び佐藤氏のコメントという盛りだくさんのフォーラムであったが、これからの上海と福井の学術交流の基礎が出来たのではないかと考えている。



## Zone B 「東アジア型教師像と教師教育の探究 —上海師範大学の研究と実践から学ぶ—」に参加して

福井県立足羽高等学校 教諭 片桐 哲也

隣国中国の教育事情に疎い私にとって、Zone B Session IIIフォーラムの特別企画『東アジア型教師像と教師教育の探究』の実践報告会は新鮮で、とても意義深く感じられました。

中国の偉大な教育者である陶行知先生の言葉「出世便是破蒙，進棺材才算卒業（この世に生まれることはすなわち学ぶことであり、その学びは死ぬときにはじめて卒業となる）」からは、中教審答申の「学び続ける教師像」に通じるものを感じ取ることができます。

国情の違いはあっても、抱えている課題が共通している部分も多く、とりわけ教師教育は、常に議論されるテーマの一つです。中国は近年、目覚ましい経済発展を遂げ、文化大革命以降、頓挫してきた教師教育に力を入れてきています。教育こそが、国の将来を決めるというのは、どの国にも共通した課題であり、その教育を支えるものの一つとして優れた教師の育成が重要なファクターとして挙げられています。特に、『上海師範大学の教師教育の現状と課題』と題した陸建非教授の実践報告の中で、教師教育改革の中の「4+2」（学部生と修士生の連続教育モデル）を打ち出している点に驚きを覚えました。というのは、日本の教師の修士レベルの取得比率が国際的に見ても、まだまだ低いと言わざるを得ない現状があり、教師としてのプロ

フェッショナル（専門職）性を高めるには、大学4年間では短すぎると感じているからです。

また、今回のゲストとして招聘されている佐藤学氏（学習院大学大学院教授）の提唱する「学びの共同体」が中国で注目され、中国各地で展開されています。佐藤先生は、中国の教育事情にも精通されており、中国には、都市と農村の格差等の問題が存在しているが、この50年間で教育レベルを一気に引き上げてきた点は、注目に値すると言われました。その要因として挙げられたのは、“一人っ子政策”による子どもの教育に対する熱心な点や中国の教育者が諸外国の教育を徹底的に研究してきた土壌があったことです。その顕著な例として、上海では、独自の教育制度を実施しており、教育レベルが高く、その上、教員が優秀であることで、PISA結果の第1位に繋がっていると考えられます。

このように、私たちは、他国の教育の現状を知ることが機に、教師教育の改革という共通の課題をもとに、各国の教師が手を携え、相互の学び合いを通して、教師自身も成長していくことが大切であると思いました。今後の教師教育の発展のポイントは、まさに、そのような教師自身が国境を越え、互いに繋がり合い、共に成長していく過程にあると感じています。

## Zone C コミュニティ

### 学び合うコミュニティを培う

#### Zone Cに参加して

岡山市立光南台公民館・主任社会教育主事 片山 るみ

ポスターセッションは、5分ではとても足りない、もっと聞きたい、という思いになりました。紹介を聞いていると、職員体制等が岡山とどう違うのか気になり始め、つい実践とは離れて聞いてしまったり、でもハテナが次々と思いつかぶのでやはり黙っておれず尋ねたりしていました。すごい！真似したい！いい事業だな！と思うと、どうやったら自分の館でもできるだろう、こういう点がネックかな、じゃあどうクリアしたのか、いやそもそもこんな問題点は福井にはないのか、等々、思い浮かびます。既に似たような事業を実施していても、うちではこういう風に発展させたな、とか。そう思っていると他の人が似たようなことを質問するので、あーそうそう、と思ったりしていました。5分という時間制限があるので、余計にいろんなことを一生懸命考えたように思います。時間が足りない、もっと聞きたかった、という感覚がありました。

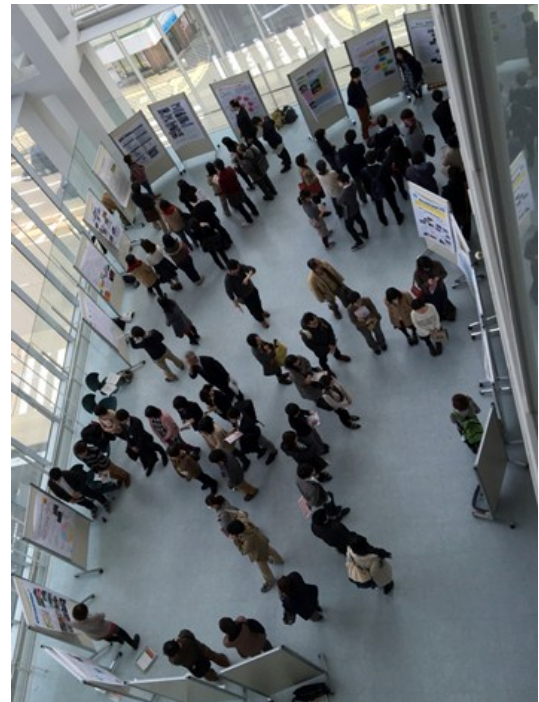
シンポジウムの遠藤さんのお話は、本当に初めてずとんと福島の体験が入ってきました。なぜだろう。本当に身近な人たちの本音の話として入ってきたのです。編集方針や人選やインタビューの取り決めを、丁寧に丁寧にしているのがよくわかったからかもしれません。語りによるエンパワメントを自分自身が実感しているからかもしれません。子育てで悩み迷っている保護者の方が、同じ悩みを持つ親の会で、涙をためて話したり、一緒にもらい泣きしながら励まし合ったり、そんな中で保護者自身がだんだん強くなっていった様子を実際に一緒にいて体験したからだだと思います。

続いての久島さんのお話は、耳が痛かったです。「公民館に来ている人だけの声を聞いていると狭い、来ていない人の声を聞けていない」。公民館の利用者は女性が大半で、世間一般に比べると女性の声は届きやすく、そこでつい、世間には届きにくい声を聞いているという気持ちになっていたようです。けれど、公民館に来ている女性と来ていない女性、例えば高齢者と若い世代と分けて考えると、来ていない若い世代の女性の声は届いていない。来ていない人の声を聞こうとする姿勢もですが、その前に、聞けていない声があるという前提にたつ当たり前の姿勢、そこを指摘され

たようで、耳が痛かったのです。

クロスセッションでは、ただただ、福井市の公民館の様子に、へえ、ほお、という状態でした。ついそのまま岡山市の公民館の様子を話してしまい、あれで実践報告になっていたのかどうか、同じグループの方には申し訳なかったです。報告をするという立場になってみて、何をどう説明したらいいのか、相手は何を知りたいのか、自分が当たり前のように使っている言葉も相手には伝わらないかもしれない、など、普段と違った目で事業を振り返る機会になりました。が、それでもうまく話せなかったし、そもそも、自分は何を話せたんだろう、とも思います。どういう思いで事業に取り組んでいるかをうまく説明できない自分に、向き合わされた気がします。

楽しくて勉強になり、そして少し苦しかった、というのがZoneCに参加しての感想です。



#### Zone Cに参加して

長野県上田市教育委員会生涯学習課 伴 美佐子

『山高みあけはなれゆく横雲の  
絶へ間に見ゆる嶺の白雪』（源 実朝）  
信州の北信五岳、そして、立山、白山…。いくつもの雪に抱かれた嶺を見上げながら高速道路をひた走

り、2度目の福井訪問の機会をいただきました。山というのは不思議なもので、見上げる場所によってまったく別の「顔」を見せてくれます。私感ですが、ラウンドテーブルは、山を見上げる行為に似ている気がし

ます。

思い起こせば昨年5月。信州より福井大学教職大学院に赴任した宮下先生から1本の電話が入りました。

「(ラウンドテーブルは)素晴らしい学びの場だよ!ぜひ来てみない?」そんなお誘いに胸躍らせて、6月のCross sessionに参加いたしました。ドキドキの時間でした。100分という壮大な時間の中で自分の実践を整理整頓しながら発表。そして、その発表を本気になって聴いてくださる方々。

教育という共通項を持つ、日本全国の様々な立場の方の実践とその省察の真剣勝負が、

「ああ、そんな風に見えていたのか」

「そんなアプローチの方法があったのか」

と、私たちの目指すべき嶺を立体的に浮かび上がらせてくれるのです。

また今回は、Zone Cにて福井市立至民中学校でご活躍いただいている「サポート至民」の山田さんとともに報告の機会を得ました。日頃、教育委員会の職員

として、学校・家庭・地域の協働に関わる者にとって、ボランティアで学校を支えつづけてくださる山田さんの口から「私たちの至民中学校」という言葉がぼろりとこぼれおちるのを聞きしとき、言いようのない温かな感動に包まれたのを、今もはっきりと思ひ出します。もはや、山田さんにとって至民中学校は、誰のものでもない「私たちのもの」。

私たちのたいせつな子どもたち。

私たちのたいせつなふるさと…。

少子高齢化が進み、50年後には15歳以下の子どもの数が半分以下になるという現在。資源に乏しい我が国の宝が「人」であることは言うまでもありません。福井では、教育という大切な役割を担う方々が「テーブルを囲んで」ゆるやかにつながり、互いに尊敬し、人の絆を結びながら、山々のような高い理念を仰ぎ讃えていらっしやることに深い感銘を受けました。

混沌の横雲が開け放たれ、その絶え間から目覚ましい眺望を試してみたいものです。

子どもたちをまん中にして、仲間として…。

## ラウンドテーブルに参加して

福井市至民中学校「サポート至民」 山田 博英

はじめに、平成27年2月28日私たちは「ラウンドテーブル2015のZone C」に参加した。昨年に続き2回目の参加です。昨年は手持ちの資料も無くラウンドテーブルの名前は聞いていたが、緊張と共に大海に放り出された感じでした。今年は私たちのこれまで行ってきたことを抜粋して十分ではなかったがそれなりの資料を配ることが出来ました。それでも場慣れしていないのでテーブルの皆様にごどれだけ私たちの事が伝えられたか反省しています。

地域の学校の応援団になる。私達の初期の活動は「ボランティアガイド」から始まりましたが、学校と親・地域が協調して生徒の育成に当たることが国の方針として強調される様になった今日、平成23年2月、グループ自ら発展的に学校を支援する「サポート至民」と名前を変えてコミュニティースクールの一員となることを目指しました。これは発足当時の校長山下忠五郎先生の意志が強く私たちの心に共鳴したからです。

何事も教科書で学んだり、知識として知っているだけでは不十分ではないでしょうか。特に当校では、地元の農家の皆さんの好意により米づくり、さつま芋づくり、そば手打ち体験、収穫感謝の会など先生、生徒、親、地域の方がたとえ話をしながら実体験する事に恵まれ、より深く学ぶことが出来る貴重な時間であったと思います。生徒達の参加希望者も大変多く意義ある時間にするために私たちは大人としてどう生徒たちにどの様に接したら良いか日頃から考え続けています。

人生経験を多少なりとも生かして先生の指示の下、授業に部分的に参加したり、課外の時間に生徒に接し普段の姿を見ると1年生のころは如何にもあどけなさが見られたが3年生になると、言葉に態度に大きな変容が見られて頼もしく感じられるのが嬉しいです。

初めの頃、校内を見て回る機会があった時生徒たちの良くない行動を見るにつけ私の心に「おい、こら」の態度が表に現れる傾向が無きにしても非ずであったが自分の言動を慎み早まる気持ちを抑えて誠実さを以って接することが肝要であると学びました。私たちの目的の一つに生徒の社会性を育む事が有ります。先に記した農作業やすべての行いに情操的な面も付け加える事も忘れてはならないと思います。

そしてこれからも多少の軌道修正をしながら「サポート至民」として息長く歩んで行きたいと思っています。

おわりに、昨年に続き参加が許された会場には飲み物も用意されていて、その気配りにホットした。第7テーブルに着くとまとめ役の熊野直彦先生の穏やかな語りで始まり緊張も和らぎ話すことが出来感謝しています。私と同じテーブルで発表された長野県上田市教育委員会、伴美佐子様の資料は実に良く構成されていました。また何時の日かテーブルを囲む機会があれば参考にしたいです。今回よりまた私たちの取り組みが充実した成果が得られように学校の先生・生徒達と共に過ごす時間を大切にしていきたいと思っています。



## 「聴く」という実践

そうそうカフェ 大竹幸浩

ZoneCでは「<女性たちの声を聴く>実践の可能性」と題したシンポジウムがあった。

私は小グループでの対話を通じて「死生を学びあう場」を培う実践に取り組んでいる。その中で「聴くという行為は難しい」と感じてきたことから、このシンポジウムで「聴く」ことについてどのような可能性が示されるのか興味を引かれて参加した。

久島幸江さん（越前市味真野公民館）は、「住民の声を、『上手に』ではなく『一所懸命に』聞き取ろうという態度で臨んだ」と語っていた。

私の場合、人の語りを「聴く」とき、それが自分の価値観と相容れなかったり、攻撃的な口調であったりして、自分には合わないと感じてしまうと、耳をふさいでしまいたくなることがある。

しかし、そのような語りであっても、久島さんと共通するかもしれないのだが、語り手に向けて「一所懸命に」じっと耳をそばだてているうちに、あたかも地中で鉱脈を見つけたかのように、あるいは、難解そうな現代アートの意味を私なりに感じ取ることができたときのように、その語り独自の文脈が脳裏に浮かび上がってくることもある。そうすると、むしろ、その語りを「聴く」ことがおもしろくなり、その語りの意味をもっと探してみたいと思ったりする。

いつもそうだということではないのだが、というよりも、稀にそういうことがあるというべきなのだが、おそらく、私はそのように「聴く」過程で、自分の思考の枠組みや語り手に対する思い込みをいったん外しているのだろう。そうして、語りに対して予断を持つ誘惑から自分を解放できたとき、スッとその人の語りが自分の中に入ってくるようなことがあるようだ。

一方、そういうとき、語り手はどのような様子かという、「気持ちが穏やかになっているのではないか」と感じるものがたびたびである。

遠藤恵さん（NPO法人市民メディア・イコール）らが、福島県内で3.11を経験し、今も福島に住んでいる30人の女性の体験を聞き取ったときに、インタビュー

イーから「話してよかった」「気持ちが楽になった」といった感想が示されたとの報告があった。

このケースでは、聴き手が全員女性であり、被災当事者であり、「聴く」ことについて鍛錬してきた方々であったからこそ、こうした感想が寄せられたのだろう。それにしても、ここに、「聴く」という実践が「語り-聴く」場にもたらす作用の一端が示されていると思った。

「聴く」という実践は、語り手と聴き手の双方に、少なくとも上記のような益を生じさせ得るし、その相乗効果によって、穏やかで豊かな場を形成し得る。これは、自分の価値観と相反する内容の発言や、差別的な発言などに対する、暴力を頂点とする過剰に対抗的な対応とは対極にある、平和的な実践のあり方と言える。もちろんそのような発言を「聴く」ためには、「聴く」ことについてのすさまじい研鑽が求められると思うが。

2人の報告者から、困難な課題を抱えている状況の中での、「聴く」ことを軸とした実践の報告を聴いて、それらの実践には、静かに場の状況を変革してゆく可能性があることを学んだ。



## Zone D 授業

### 授業改革の扉を開く

—教師は授業sで何を残したいのか?—

## ラウンドテーブルを振り返って Zone D

福井大学教職大学院 非常勤講師 富永 良史

ZoneDでは、これまで5回のラウンドテーブルを積み重ねながら、授業にまつわる問いを深めてきた。子どもの目線から授業を体感し、授業者としていかに冒険できるかを問い直し、授業を駆動する問いはどのように生まれるのかへと問い進め、質の高い学びを生む問

いはどのようなものを問うに至った。迎えた今回、原点をまっすぐに見つめ、「私たちは授業の積み重ね（授業s）の末に何を残したいと願うのか」を聴きあい、語りあった。

Session I。4枚のポスターに囲まれた空間に実践の



語りと傾聴の熱が満ちた。牛久市立下根中学校から「わからないさの共有」による学びの共同体が、勝山市立鹿谷小学校から地域の自然にふれあい実感とともに理解を深めていく「持続発展教育」が、横浜山手中華学校から笑顔と好奇心にあふれる「美術教育」の光景が、お茶の水大学附属小学校から子どもの自主性を生かした「ひろがる・つながる学びをつくる」フレネ教育が、次々と語られた。語り進むにつれ、場には一体感が生まれ、4つの物語が積み重なり、ともに授業を考える対話の萌芽が宿った。



Session II。会場の扉を開くと、壁面をうねる巨大な龍が迎えた。龍は横浜山手中華学校の子どもの美術作品。子どもたちの手と心の結晶に囲まれた会場で、「子どもの頃の授業で、何を覚えている？」と問いあうことからセッションが幕を開けた。驚いたこと、先生の脱線、解った喜び・・・かつての授業の記憶が和やかにわかちあわれた場に、最初の報告、山梨県見延町立大河内小学校の古屋和久教諭の語りが染み渡った。その語りは、子供たちが夢中になって学びあう「教室文化」をいかにつくり育てるかに源を発し、授業外の活動を学びを支えるものへと捉え直すこと、事

例としての「学びの足跡」を残すノート指導へと展開していった。

静かな語り内に包まれた学びへの真摯な思いに背中を押されるように、私たちは互いの胸中に残る余韻を対話し、次に問いを進めるべきことを模索した。象徴的な問いが学生から投げかけられた。「学びあいの大切さは理解できる。でも、どうやったらこういう授業ができるのでしょうか？」。この問いは、次のセッションへの橋渡しのように響いた。

Session III。続く報告で、埼玉県立新座高校の深見宏教諭から、生徒が主体的に学びあうために必要な「解放」が語られた。「ここでなら自分を表現しても受け入れてもらえる」と安心できる解放された関係と空間に、身近なものに翻訳された授業テーマが投げ入れられた時にこそ、生徒はつながりあい学びあいを始めるのではないかと。柔らかく穏やかな語りにより耳を傾けるにつれ、私たちの思考と関係はゆったりとした深まりを帯びた。

ふたりの教諭の報告が4枚のポスターの物語とも結びつき、余韻が様々に交錯し融合し触発した。ここに至り会場には、授業の本質を問い進めるにふさわしい充実した空気が満ちた。しかし刻限は訪れ、最後にひとつの問いに思いを巡らせるにとどまった。「私たちは、授業の積み重ねの中で、子どもたちに何を残したいと、本気で願っているのだろうか？」。沈思の後、多様な思いが多様な言葉で紡がれた。いずれもが教科を超えて、学ぶことの本質とは何かを見通していた。

今回のZoneDは、私たちに何を残しただろう。掲げた問いの大きさに比して過ぎた対話の時間はあまりに短く、達成感より、さらに問いを進めなければならないという教師としての責任や意欲が残されたように感じた。途中、学生から投げかけられた「どうしたらこういう授業ができるのでしょうか？」という問いは、問いとして響き続けるからこそ、そのような授業が可能になるのかもしれない。

## 茨城県牛久市立下根中学校長 岩田 博

正直私は、ラウンドテーブルが何を意味するのかさえほとんどわからないままの初参加だった。福井のおいしい蟹でも食べに行く程度の軽い気持ちで参加したのだったが、その思いは大きく裏切られ、学びの多い2日間になった。

初日のZone D Session Iで私は下根中学校の授業づくりについてポスターセッションで発表した。まず発表テーマの幅の広さに驚かされた。大学なのだからそれは授業づくりについてのかかなり内容を絞った専門的な発表会になるかと思いきや、音楽教育から自然観察の授業と何でもありの太っ腹。その後のSession II IIIでもあらゆる分野の先生方とグループを組んで話し合い。それなのに全く疎外感を感じることなく、共に学び合うことができる懐の深さと温かさがそこにあった。夜ホテル前の居酒屋で仲間と飲みながらラウンドテーブルでの学びを振り返ることができた。越前ガニは高く手が出せなかったが、ズボガニはとても美味しくいただけた。

そして、2日目も全く異なる分野の方たちと、まさ

に丸テーブルを囲んでたっぷり半日間の語り合い。最後はその日初めて出会ったグループのメンバーが、あたかも昔からの同僚のように笑いながら学びを交わすことができた。まるでごっちゃ煮のような学び合いの場。それが福井ラウンドテーブルの本質なのかもと気づいたときにはあつという間に時間が過ぎて終わっていた。福井大学恐るべし。



身延町立大河内小学校 教諭 古屋 和久

「大きくて小さい研究会」。実践研究福井ラウンドテーブルの魅力を一語で語るとしたら、この言葉がぴったりだと思います。ハーグリーブス先生の「知識社会の教師の資本」という大きな教育の世界に出会うこともできれば、1時間の授業という小さな教育の世界にもじっくり出会うことができました。参加者が非常に多い大きな研究会ですが、6人という小さなグループでじっくり語り合うことができるのもラウンドテーブルの魅力です。

6月に続いて2度目の参加になるわたしは、教師が日常的に行っている小さな教育実践を例に、「教室文化」という大きな話をさせていただきました。2日目のクロスセッションで報告された実践は、個人や学校(大学)、県という小さな単位で取り組まれたものですが、「教育」という大きな世界や「日本社会」の抱える大きな問題、「豊かさとは何か」「いかに社会に貢献すべきか」というような大きな問いに向き合うことができました。

わたしの発表した「学び合う教室文化」を育てる実

践について、鹿児島大学や福島大学の学生さんたちとお話する時間がとれました。彼ら・彼女らの教育に対する真摯な思いの一つでも小さな灯りをともすことができたなら嬉しく思います。やがてそれが、研究や教育実践上の大きな「力」になってくれることを願わずにられません。



福井県小浜市教育委員会 指導主事 加福 秀樹

授業改革の扉を開く～教師は授業sで何を残したいのか～に参加し2つのことを感じました。

1つは「学び合いの土壌づくり」の重要性です。学び合いは分からないことを分かろうとする「なんで?」「どういう意味?」などの問いから生まれる。問いは自分の考えを持つことから生まれ、学び合う教室文化の上に成り立つ。この両面をバランスよく形成していくことの大切さを再認識できました。

2つ目は「学び合うことの心地よさ」です。グループ内での意見交流は多くの刺激があり、聴きあうことが心地よく感しました。そのせいか時間とともにメンバーの関係性は強まっていきました。まさに子どもに

味わわせたい気分を味わっていました。

また、学び合う中で自然と自分の実践をふり返り、「自分はなぜ教師になったのか」「教師になって何がしたかったのか」を自問自答していました。私自身の教育観を再確認し、今後「何を残したいか」が見えてきたような気がしました。

気がつけばZoneDは「学び合う心地よさ」と「原点回歸している自分」を私に残してくれていました。何を残すかも重要ですが、いつのまにか心に残せるこの腕前こそ私が一番学ばなければならないことなのかもしれません…。

埼玉県立新座高等学校 教諭 深見 宏

東京駅から3時間半。新幹線と特急を乗り継いで福井大学へやってきた。総合研究棟の窓から見える山脈は雪でまだ白い。出発地とは質の違う寒さの福井市にあって、ラウンドテーブルの会場は全国から集まった教育者の熱気で充満していた。

そんななかで、「解放して伝える 使って残す」をテーマに、生徒のなかに学びを残すための授業実践と、授業方法から一歩戻って伝わる状態を整えるということ、学びの内容を使う場面を想定することで残していくということについて発表させていただいた。

内容は、生徒を解放することで他の生徒や教師へ考えを発信し受け取ることができる状態をつくり、生徒の力で内容を濃くしていく授業を行うことで記憶を「エピソード」にまで引き上げる。そこへさらに授業で学んだことの使用場面を想定させることで、生徒が実生活で授業から学び取ったことを使用する場面に気づきやすくする。教室の中のつながりの網目を細かく

するための会話や、学んだことを使用する場面の想定は、生徒と教師お互いのなかでフックとなり学びの残存濃度を増すことにつながるというものだ。

これに対して会場の方々からは、生徒の状態やフックに対して様々な感想や質問が挙がった。これらを聞き深めていくなかで、生徒ばかりではなく教師の側も授業方法の選択や生徒理解に対して閉じている部分があったのではないかと。教師同士も互いに対話し授業や生徒に対するフックを多くもつことで網目が細くなりより効果的な授業が提案できるのではないかとということが見えてきた。

また、実践報告で隣り合った先生から出た「自分もあの先生の実践を取り入れた指導をしたのだけれど、どうしても自分には合っていない気がする」という言葉や、翌日のラウンドテーブルで出された「教育の地域性に胸を張っても良いのではないかと」という言葉からは、良いと言われている実践を画一的に取り入れ

るのではなく、教師のパーソナリティに合ったやり方をその地域に住む生徒（あるいは生徒個人）の特性に合わせて提供することが教育の効果を高めることにつながるのではないかとこの考えが浮かんだ。山脈を越えて3時間半も離れているのである。関東と北陸でもこれだけの時間がかかるのだから全国の学びの場に存在する教師や生徒の質にも多様性があるはずだ。

生徒と教師をつなぎ、かろやかな発想で地域や生徒の状況学びの要求に合った教育方法を選択する。そのような新たな教師像を今回の報告会から手に入れることができた。聞いてくださった方のなかにも明日の教育に対するヒントを残せたならば嬉しく思う。

## Session IV

### 実践の長い道行きを語り展開を支え営みを聞き取る

Round Table Cross Sessions



Session IV  
それぞれユニークな形で各テーブルごとに活発な意見交換が行われた



## Round Tables: Spring Sessions 2015

ラウンドテーブルに参加した院生からの報告

### ラウンドテーブルに参加して

教職専門性開発コース平成26年度修了生 坂下 元

去る2月27日。私は小松空港にいた。今回のラウンドテーブルでシンポジストとして来福されたアンディ・ハーグリーブスご夫妻を福井までお連れするというミッションのためである。小松空港から福井までの約1時間、私は緊張しながらもハーグリーブスご夫妻とお話をさせていただきながら福井に向かった。道中ハーグリーブスご夫妻は一院生にしか過ぎない私に様々な話をしていただくと同時に、じっくりと私の2年間の福井大学と拠点校での学びの過程に耳を傾けてくださった。1時間ほどの時間であったが、翌日から

のラウンドテーブルに対して期待を膨らませるには十分な時間であった。

翌日はラウンドテーブル1日目。私は引き続きハーグリーブス教授のガイドをしながらゾーンAに参加した。ハーグリーブス教授のスケジュールとの兼ね合いもあり、私は短い時間しかセッションに参加することはできなかった。私はハーグリーブス教授と共に自らが実習を行っている至民中学校の鈴木三千弥先生の発表を拝聴した。おそらくは100名を超える聴衆の前でのご発表であったが鈴木先生は生き生きと至民中学校

での取り組みをお話された。「多忙感」が「充実感」へ変わるような1年間の取り組みを時にその場にいた中学生を話に巻き込みながらの発表だった。ハーグリーブス教授は鈴木先生の発表を聞きenthusiastic(情熱的)と言葉にされた。至民中学校の実践者の端くれとしてとても誇らしかった。私事ながら私は来年より、愛知県にて教員として励む。現場に出るという不安感が鈴木先生の発表を聞き、これほどの現場で経験を積ませてもらったことを来年から活かしていこうという「期待感」へと変わっていくことを感じながら会場を中座した。

最終日となる2日目は自身の2年間の学びを報告することとなっていた。私は福井大学の富永先生、長野県信州大学附属中学校のA教諭、武生市内の小学校のB教諭、大学生のCさんとテーブルを共にすることとなった。まずは私の報告。80分という時間の中で「生徒との関わり」「授業実践」「地域連携」の三つについてじっくりと報告をさせていただいた。これら三つの要素を貫くものをまとめ切れなかった報告であったと反省するが同じテーブルの皆様はそれぞれのお立場からコメントをくださった。A先生は2年間の実習では体験することができなかった保護者との連携の在り方という視点で、特別支援コーディネーターであるB教諭はユニバーサルデザインという視点で授業を構成するという視点を与えてくださった。異なる領域の方からの意見で自分の実践がより広く見えるようになることを私はこの二年間で何度も体験している。次に武生

市内の小学校のB教諭から特別支援コーディネーターとしてのお立場で支援を要する児童とその保護者、または、担任の先生への支援の実際が報告された。詳しい報告の内容は割愛するが、2年間の実習の中では体験できなかった緘黙の児童とその保護者への支援の実際を赤裸々に語っていただいた。特別な支援を要する生徒を支えるには、保護者と手を携えていくことや外部機関との連携が不可欠であることを改めて考えることができた。

最後に信州大学附属中学校のB先生の報告となった。信州大学附属中学校では3年間を貫く総合の学習が展開されているという。B教諭のクラスでは地元の温泉街を盛り上げるというプロジェクトの元、学習が展開されているという報告だった。報告もそこそこにB教諭は「今後の学習をどのように展開すればよいのか何か提案ありませんか？」とテーブルのメンバーに意見を求めた。そこからはテーブルの全員が生徒の学びに思いを馳せながらいくつかの提案をしていった。時間が経つのを忘れてしまうほどの時間だった。報告の終わり際「先生、ラウンドテーブル最高ですね。」と一言。私も全く同じ気持ちだった。話し手が自らの経験や思いを開き、語る。聞き手は話し手に寄り添うように、自分の実践に照らし合わせながら傾聴する。そんなダイナミックなラウンドテーブルに院生として参加するのはこのラウンドテーブルが最後になるが現場に出てからも参加したいという思いを更に強くさせるような3日間であった。

## 実践研究福井ラウンドテーブル2015 spring sessions に参加して

スクールリーダー養成コース平成26年度修了生／福井大学附属中学校

永廣 裕子

毎年、参加者が増えるラウンドテーブル。今年も約700名を超える参加があり、いろいろな方と交流する機会に恵まれた。私も回5目の参加であるが、中には、前回同じテーブルになった東京の大学院生の姿も見られ、これからの教育を担う世代が多く集まっていることに頼もしさを感じ嬉しくなった。

まず、1日目のSession0では、『知識社会の教師の資本』の著書であるボストン・カレッジ教授のアンディ・ハーグリーブス先生の御講演、並びに学習院大学教授の佐藤学先生、東京大学大学院教授の秋田喜代美をお招きしてのシンポジウムが行われた。これから知識社会の中で子どもたちの学びをどう展開していったらいいかを、これまでの日本の教育、フィンランドやシンガポールなどと比較しながらお話しされた。知識が高度化し、流動化する社会において、教師も常に新しいことやものに対して見通しを持ち、それに対応できる柔軟性が必要である。また、年齢層が多様な教員組織の中では一人で取り組むには限界があり、組織で対話しながら、協働で成し遂げていくことが大切であると感じた。

Session I では、現在勤務している附属中学校の研究組織についてポスターセッションを行った。また、今回初めて本校2年生の学年プロジェクト実行委員

が、これまでの総合的な学習の時間で追究している“笑い”について発表した。1年生からどのように追究してきたのか、どのようなことを学んだのかを発表した。質問されたことにも自分たちなりに誠実に答えている子どもたちに感心した。自ら取り組んだ成果と課題をありのまま発表するのは大変新鮮であった。福井市の安居中学校や藤島高校の生徒も参加しており、次回は子どもたち同士が話し合う機会も持てたら、さらに意義のあるものになる気がした。

続いて、Session II のZoneAでは学校というテーマで、『子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり』について、学校改革、授業改革の実践事例を手がかりに共に考えていった。教師は常に多忙であり、ストレスを抱えている。また、教師の年齢の格差、学級・学年・教科の壁がある中で、何が教師のやりがい、喜びになるのか。それは、「子どもたちの育ち」である。「子どもが楽しい」と思えば、「教師も楽しい」と感じるのである。長野県の中野小学校、至民中学校、石川県の金沢大学附属高校の実践からも、様々な課題を克服し、教師が組織となって改革することで学校、子どもが変わっていったことが報告された。様々な世代の教師間で、コミュニケーションを取りながら“喜び”や“やりがい”を見つけていく。学校を

変えるのは、並大抵のことではないであろう。しかし、子どもたちが「学校を楽しい」と思ってくれることを願い、改革していく取り組みに大変感動した。

2日目は、教職大学院でまとめた長期実践報告書をもとに、これまで附属中で学んできたこと、理科教員としての意識の変容と今後の展望について報告した。

同じテーブルの早稲田大学の中川翔太さんは、模擬選挙をきっかけとして試行錯誤しながら子どもたちとともに活動した取り組みについて報告された。小学校で卒業アルバムのタイトルを決める際、みんなで理由を挙げながら協働で一つのものに決めていく取り組みは、簡単なものだが中学校でも実践できると感じた。岡山市立光南台公民館の社会教育主事の片山みさんは、公民館を拠点として中学生との関わりについて報告して下さった。部員数が少なく存続が難しかった中学校の吹奏楽部に、地域の人たちが加わり音楽を

通して交流する姿などを語って下さった。公民館がコーディネーターの役割を担い、地域と学校と子どもをつないでいく。いろいろな課題を乗り越えながら、子どもたちを育む姿が伝わった。

毎年、このラウンドテーブルに参加すると、教育は学校だけが行っているのではないことに改めて気付かされる。いろいろな方が子どもたちを温かく見守り愛情をもって育てていることを実感する。普段、子どもたちと過ごしていると、残念ながらそのような気持ちを忘れかけることがある。教育の一番大切な子どもたちへの愛情に再度気づかされ、日頃の自分の姿勢を反省させられた。

今回のラウンドテーブルでも、新たに新鮮な考えや取り組みに触れ温かい気持ちになった。そして、「また明日から笑顔で頑張っていこう」というパワーをいただき、明日につながるものとなった。

## ラウンドテーブルに参加して

スクールリーダー養成コース平成26年度修了生／福井市藤島中学校 竹野 亨

思わぬ雪が降り、春とはいえ肌寒い中、ラウンドテーブルSpring Sessionsが2月28日と3月1日に行われました。教育にかかわる人たちが日本各地より福井に集い、長い期間で展開されてきた実践を語り、じっくりとその実践を聴き、聴いたことで見えてきた思いを、また語り合うことで、会場内は、外の寒さを吹き飛ばすかのように熱気にあふれていました。

ボストン大学のアンディ・ハーグリーブス教授は教育についてどのような話をするのだろう、佐藤学先生や、秋田喜代美先生は「学び」そのものや「学び合う」ことについてどのような新たな視点を提示されるのだろうという期待に満ちた気持ちで大学に到着しました。会場の2階大1講義室に向かおうと階段を登り終えると、書籍販売があり、早速購入し、席に座ると「知識社会の学校と教師」の序論を読み始めました。読み進めていくと、「認知的な学びと同じくらい情動的な学びを」という言葉が目に入りました。いったいどんなことなのだろうと考えたり、同時通訳の機器にちょっととまどっているうちに、セッション0がはじまりました。

ハーグリーブス教授は、1995年に日本を訪れ授業を見たときのことを次のように語っていました。「協働についてであるが、関係性、信頼性、家族性が必要であるが、その当時はグループで活動していても形式的だった」と。確かに自分の数学の授業を振り返ると、グループで考えを出し合い、課題解決を行い数学を体系化させていくことが授業の目標であったと思います。グループで行われている話し合いによって、どのように人と人との関わりがあるかという点については考えられていませんでした。「認知的な学びと情動的な学び」の意味することなのかなと思いました。そして、ハーグリーブス教授は「専門職である教師に」と次の3つのことを私たちに提案しました。「1つめはどのように時間を使うか、2つめはどのように協力するか、3つめは教師はキャリアを活かしてチャレンジしているか」です。社会が変わっていく中で、その社会に対応していく子どもたちを育てる教師として、実

践、省察のサイクルを行っていくことの必要性を改めて強く思いました。佐藤学先生は、「21世紀の教師は、教える専門家から学びの専門家への転換が必要である」や、「学ぶ教師だけが幸福を享受することができる」と語っておられました。また、秋田喜代美先生は、「各学校は協働のサイクルを1年かけてつくっている」、「『知識』は分かち合うほど豊かになる」と語っておられました。子どもたちが主体的に協働しながら課題を解決する授業をめざし、授業の課題をどのようにするか、子どもたちの協働で何を求めるのかを、他の教師と協働しながら研究を進めていくことが大切だと思いました。

Session IIでは、文部科学省鈴木寛先生の、「1600万人いる子どもを一律にして『日本の子どもは』とっている時代ではない。個別、具体的に力を注げる教師がのぞまれる」という言葉が印象に残りました。また佐藤学先生も「一人の子どもが、一人の教師がどのように学ぶのかということが大切」と語りました。私は、学校の中では、集団という枠組みも大切な視点だと考えています。そして、子どもと教師の「個」を成長させていくということもこれまで行われてきていると思います。でもさらに、授業での子どもたちの言葉や表情を思い出しながら記録を繰り返し残し、個の変容に視点をあてた取り組みを行っていかなくてはと思っています。

2日目の語り合いも楽しいものでした。グループの初対面のぎこちなさも最初だけで、ファシリテータの高井良先生（東京経済大学教授）の穏やかな語り口と、メンバーの「学び」に対する純粋な思いで、すぐにほっと安心できる雰囲気へと変わりました。「授業では答えが出てからどのように発展させていくか、ほかの子どもたちとどのようにかかわり合わせ学ばせるかが大事」とそれぞれの先生方の実践をもとにした話し合いになりました。自分が日頃から考えていることと意見を共有できたときはうれしかったです。このように思いや考えを互いに受け止め、返してもらえる場、それがラウンドテーブルの魅力かなと思います。

そして、今回も、自分の次への実践にむけて元気をいただきました。

2年前のラウンドテーブルを思い出しますと、自分のこれまでの経験と実践をもとにした陳腐な考えに固執し、批判的に話を聞き、話を素直に聞き入れることができない場面も多々あったように思います。それが

今回は、すべてのことが自分の学びとして、自分のこれまで考えていなかった新たな視点として、頭や体に浸透していくのを感じます。自分自身がまた変わっていけるのではないかということを感じた2日間になりました。

## 教師は「楽しい」専門職である

教職専門性開発コース2年／福井市至民中学校

高田侑来

2月22日、福井県に春一番が吹いたとの発表があった。昨年より18日早かったようだ。それから約1週間後の2月28日、福井大学のキャンパスにもそれは吹いた。しかしあの場に吹いた爽やかな風は、季節を感じるだけのものではなかったはずだ。人それぞれ感じ方は違うが、どこか「新鮮」で、かつ「学び」のある、そして何よりワクワクする「楽しさ」がある刺激的なものだったのではないかと。少なくとも私はそう感じた。

2日間に渡って行われたラウンドテーブル。私はたくさんの方の言葉、実践、考え方、そして人と出会った。その中で特に印象に残った1日目のシンポジウムの内容を中心に報告させていただく。

私はZone A「学校」のセッションに参加した。テーマは「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」。その中で今回は「子どものこと、学校の事を語り合える組織づくり」に焦点をあて、午後に行われたシンポジウムでは校種が違う三名の先生の実践に耳を傾けた。長野県中野市立中野小学校の武居先生・金沢大学附属高等学校の風間先生、そして私のインターンシップ先でもある福井市至民中学校、鈴木先生の報告である。先生方が学校運営の中心としてどのような実践研究会を企画し運営しているか、その工夫を中心に話していただいた。共通していると感じたのは以下2点。まず職員が自分自身の気持ちや経験を語る場を設けること、そして研究内容に仲間（同僚）の希望や悩み、つまり本音を聞き入れ盛り込むことである。

まず、これを読む教員の皆さんは自校の研究会にどのような心意気で参加されているだろうか。想像するにその気持ちは決して明るい、前向きな気持ちとは言えないと思う。その理由は、つまらない、面倒というマイナスなイメージが付きまとうからだと予想される。これを改善する一つの方策が、教員が自分自身のことを飾らず「語る」という行為、そしてそれが出来る場を設けることであることを今回知ることができた。私が思うに教員は、日々の業務に追われ公式な場で悩み等自分の胸の内を吐露する機会はほとんどない気がする。もしあっても雑談がてら仲の良い同僚と話すのがやっとだろう。そこで、研究会内で授業の事、生徒指導の事、その他悩んでいる事を学校が抱える課題にそって自由に語る機会を設けることで、教員同士の絆が徐々に深まっていく。またこの気軽に、自由に、というのがポイントで、フランクに話す事で業務感がなくなり、より充実感を味わう事ができると思われる。実際、武居先生が用いていたスライド内の写真に写る先生方は、どの方も表情がよく生き生きと「楽

しそうに」していた。この場がきっかけとなり、研究会に対するマイナスイメージを払拭し、なおかつ充実感も得られればこんなに良い事はない。また人と語り合うことで教師という職業が本来持つ、「人と関わることができる楽しさ」を取り戻すきっかけになるかもしれない。

二つ目に関しては、私が所属する至民中の鈴木先生のお話をご紹介したいと思う。鈴木先生は様々な経験や教育観を持つ同僚の顔を思い浮かべながら、楽しい時間にしたい、実りある時間にしたいという一心で研究会をしかけていた事実を、あの日初めて知った。特に同僚の本音や要望に応えるという形で研究会を企画運営されていた。例えば、私も参加したある月の研究会での話。至民中の教頭先生が講師となり、学級経営についての実践を語っていただいたことがあった。実はこれは先生方の中に、学級経営についてもっと知りたい！との声が上がったことがきっかけだったそうだ。このように同じ現場で働く仲間の「やりたい！」や「知りたい！」といった本音に耳を傾け、ニーズに応じてくれるからこそ、参加する私たちもやる気になる。何より「学びたい」との欲が湧く。それが満たされるゆえ自然と「楽しい」という感情がわいてくる。今回鈴木先生の報告をきいて、私自身毎月の研究会が苦でなかった理由がはっきりした。ラウンドテーブルという場で、自分たちの研究会の概要を聞くなど、そう頻繁にあることではない。私の立場は院生なので同僚と言えぬかは分からないが、それでも同じ現場で実践研究を共にしてきた一人として、堂々と発表される先生の姿を拝見できたのは素直に嬉しかった。

以上先生方の発表を簡単にまとめたが、こうして筆を進めているうちに「教師は、人（生徒や同僚）と共に楽しさを求める（べき）仕事」という考えが生まれた。どんなに辛くても、いや、辛く厳しい職業だからこそ楽しさを追い求め、目指すべきなのかもしれない。しかしこれは一人では難しい。かならず人が居て、その人に本音をぶつける、そのような機会を設ける事で辛さも楽しさを共有する事ができるのではないだろうか。

「生徒は先生の移し鏡である」と言う言葉がある。今回のラウンドテーブルでもこの言葉を耳にした。本当にその通りである。教師が生徒に与える影響は大きい。良くも悪くも。だからこそ、この言葉を胸に刻み、教師としての役割や仕事を見直す必要があると感じた。その一つが、「楽しさ」。私たちが充実感を求め、楽しそうに人と接すれば、きっと何事もプラスに働くに違いない。

## スクールリーダーだより

### 福井県立足羽高等学校／片桐 哲也

福井県立足羽高等学校は、昭和51年（1976年）に福井市の4番目の普通科高校として誕生しました。その後、平成元年（1989年）には、中国語コースが、平成3年（1991年）には英語コースがそれぞれ開設され、現在、普通科3クラス（平成26年度は4クラス）と国際科2クラスの編成となっています。

本校は、「進取」「積極」「創造」の校訓の下、全人教育を主眼に置き、自然豊かな環境の中で、部活動と国際交流の盛んな高校として、特色ある学校づくりを目指しています。基本的な生活習慣を確立し、基礎的な知識や技能を身に付け、部活動を重視する教育活動が行われており、生徒への生徒指導や進路指導には日々の高校生活や部活動で培われた集中力や忍耐力が生かされています。特に、進路先に関しては、部活動における更なる競技力向上のため、大学進学をする生徒がいたり、部活動で培われた人間力を生かして、大学や就職の合格を勝ち取る生徒がいたりと多種多様です。

学校全体の新たな取り組みとして、平成25年度より、基礎学力の定着・進路指導の充実を図り、部活動を活性化させるために、週34単位45分7限授業を導入しています。本年度は、昨年度の取り組みを更に改善し、学校設定科目（足羽タイム）として、「足羽ベーシック（学び直し）」を1年次に、「ドリカムタイム（進路実現支援）」を3年次に配し、2年次には各コースの重点科目を増加単位で実施しています。

さらに、平成25年度より「授業改善重点実施校」に指定され、授業改善に関するさまざまな取り組みが行われています。

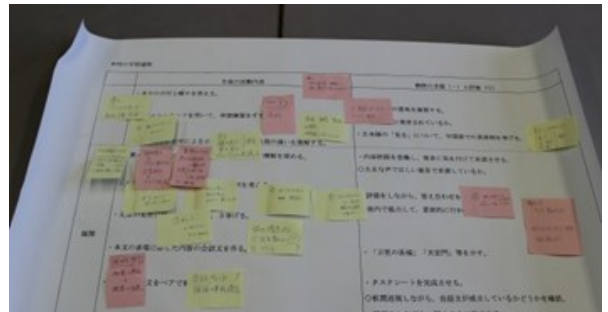
授業改善の目的を「生徒の学力向上を第一と考え、よりよい授業を生徒に提供するために自身の授業力改善に向けて努力するとともに、授業参観と意見交換を重ねる中で授業について語り合える仲間づくりを行い、『授業改善に前向きに努力する教師集団』を目指す」と決めました。

授業研究グループは、教員一人ひとりの授業研究テーマを基本として、同じテーマごとに集まり、教科を超えた教員グループを構成しました。グループ内で、1名は6月に、もう1名は11月に授業名人を招いた研究授業を行います。研究授業実施日は、一人ひとり



がじっくり参観できることを考えて、第1回目が6月17日を中心とした分散開催、第2回目が11月27日の一斉開催としました。また、それらの授業研究を支えるべく、授業研究グループメンバー全員による授業公開を行い、他の一般授業には、第1期（6月2日より2週間）と第2期（11月10日より2週間）授業公開期間を設けました。

授業参観では、これまで生徒の学びを「見取る」ということを意識して取り組んできましたが、本年度は、昨年度の授業の「見取り」が難しいという意見を受けて、授業参観時に付箋を用いることにしました。付箋には黄色とピンク色の2種類があり、黄色には、プラス成果「生徒が輝いていた」「生き生きしていた」「この発問で考えはじめていた」等を記入し、一方、ピンク色には、「生徒が気になった点」「もう少しこうした方がよい点」を記入し、一枚につき1項目を入れるようにしました。その結果、研究協議会での発言が活発となり、研究授業者や参加している教員が有意義な話し合いを行うことができました。事後のアンケートにも「先生が自分の思いを自由に話せる雰囲気がある」「忙しい中で実践していくのは大変だが、大事なことなので、継続しないといけない」等、その満足度が見て取れました。



このように、「学力向上」を目指した新たな取り組みは、まだ産声を上げたばかりですが、着実に一步一步前進している感があります。今後も、これらの取り組みを通して、全職員が生徒のために何ができるのかを常に考え、自由闊達な語り合いを続けることが大切だと感じています。そのことによって、授業改善に向けた全職員の「ベクトル」を揃えることができると思っています。

これらの取り組みを推し進めるに当たり、最も重要なことは、現在の生徒に関するデータや数値を示し、「現状認識を共有化」することだと思っています。それは、現状をみんなで一緒に考えようと立ち位置を揃えることです。そうすれば、現状から「あるべき姿」と「ベクトル」を導き出すことが容易になります。これからも、授業改善の取り組みを通して、全職員が一丸となり、「あるべき姿」に向かって努力していきたいと思っています。

## 越前市武生第三中学校 / 青木 敏之

本校は、近くに村国山・日野川があり自然環境に恵まれている。それらは、市民の憩いの場として公園やランニングコースなどが整備され、本校生徒もトレーニングコースや自然観察の場として普段から利用している。毎年11月3日には、越前市が開催する菊花マラソンが行われ、日野川河川敷がマラソンコースの一部、そして本校グラウンドがゴール地点となっている。大会には多くのブラインドランナーが参加し、生徒・保護者・教員もボランティアとして大会に参加協力する。それぞれ学年や体力、これまでのボランティア経験の差も考慮しながら、ランナーと一緒に走る伴走ボランティアや大会運営・沿道での応援まで、様々な活動を生徒自身の希望によって行っている。越前市の大規模な行事のお手伝いをさせていただくことで、毎年ボランティア活動に参加する機会を得ている。

本校では、菊花マラソンボランティア以外にも幾つかのボランティア活動や公民館活動に参加する機会があり、それらに合わせて道徳の時間や総合的な活動の時間、学級活動にも関連項目を配している。これらの活動や関連項目を「福祉総合」と名付け、これまで10年以上にわたり取組を行ってきた。武生第三中学校の紹介をするとき、「武生三中は、ボランティア活動の盛んな学校です。」と誰もが口にする。しかし、取組開始から10年以上が経過し、教員の異動により開始当初の理念を知る者も少なくなり、形式化してきている部分も多かった。「福祉総合」の名はあるが、活動の目的は何か、各活動がどのように相互関連しているのかといった、大切な理念の部分が抜け落ち始めていた。菊花マラソンのゴール地点という地理的条件に恵まれ、地域自治会や市役所の協力も得られている現状を風化させることなく、今後も有効に活用すべきであると考え、10年先を見据えた新たな方策について探ることとした。

平成25年度は、関係する先生方との話し合いを中心に、現在の問題点や改善案について検討し、新たな方向性を探っていった。その結果、平成26年度より、これまで一人に集中しがちだった業務全般を、健康教育部と管理部の「合同部会」による運営という形態に変更することとした。多くの教員で業務分担することで、業務の一極集中を防ぎ、「福祉総合」全体の形式化を防ぎたいとの狙いがあった。さらに、毎月定期的に行う部会で取組内容を検討することで、そのノウハウを部会員でクラウド的に共有し、特定の教員が異動した

後にもノウハウや理念が失われることのないよう配慮した構成になっている。部会業務の一部とすることで、今後の時代背景や環境の変化に合わせて取組内容を変容させられる可能性も持たせた。また、新たな組織形態を検討してゆく過程で、「赤ちゃん抱っこ」体験学習という本校にとって新たな活動案もでてきた。さらに、「赤ちゃん抱っこ」体験学習開催について周囲と話を進める中で、「福祉総合」も「赤ちゃん抱っこ」体験学習から繋がる「命に関する教育」も、中学生から大人へと成長していく過程で重要な事項であるとの認識が共有されるようになった。一見すれば別分野であるが、中学生に身につけてほしいことと考えれば、ボランティア精神を持つことも命を大切にすることも、重要な事項である。これまで「福祉総合」という従来の枠組みにとらわれていたものが、一気に枠から解放された瞬間でもあった。

平成26年度は「合同部会による運営」と「赤ちゃん抱っこ」体験学習の実施に取り組んだ。さらに、これまでボランティア活動に特化していた「福祉総合」の内容を「命に関する教育」と関連づける過程で、「生き方」という共通項を見つけ出すこともできた。それは、日々の学習やキャリア教育・部活動・人間関係等々、中学生が学校生活で体験する全ての事項の進むべき方向性を表していた。ボランティア体験、命に関する学習など、これまでの活動も「生き方」を学ぶ活動の一環と捉えることができる。自身が人としていかに生きるかを追究する活動ならば、生徒達の取組に対する姿勢もより能動的になると予想できる。さらに、「生き方」の理念を生徒・保護者・教員の三者で共有できるように、スローガンを「自分の『生き方』を見つめ、未来をデザインする」とした。「生き方」を追究することは、学校だけではなく家庭でも行われる活動だとの考えから、2月に行われた新入生説明会において来年度入学予定の保護者にも担当より説明を行った。来年度スクールプランにも反映させ、取組をより進めていく予定である。

今回、「福祉総合」の再構成を模索して始めた取組であったが、「生き方」というキーワードで全ての活動が繋がるという当初予想していなかった展開となった。今後、さらに取り組みを進めることで、武生第三中学校が「ボランティア活動の盛んなところ」から「自身の『生き方』を学ぶところ」へと、より良く変化することを期待している。

## おおい町立名田庄小学校 / 赤井 孝行

名田庄小学校は、平成18年3月におおい町と名田庄村が合併し、おおい町立名田庄小学校となりました。おおい町は福井県の西端に位置し、京都府綾部市や南丹市に接しています。歴史的にも京都との繋がりが深く、京都へ鯖を運んだ鯖街道や陰陽師で有名な安倍晴明の子孫が住んでいました。

自然が豊かで学校の横には、南川が流れています。南川は小浜から若狭湾に注ぎます。鮎釣りのシーズン

になると県内外から、多くの釣り人が鮎を求めてやってきます。ちなみに、冬はボタン鍋が有名です。山に囲まれていて、秋には校舎から紅葉狩りができます。800~900m級の山々が多く、中でも八ヶ峰と頭巾山は登山客に人気の山です。春の遠足では、八ヶ峰の登山をします。夜になると星がきれいに見えます。星の観察に最高の場所です。



**(1) たてわり活動**

本校には、他の小学校と同様に学年を超えた集団があります。たてわり班とよんでいます。6年生をリーダーとするたてわり班は大きく分けると4色あり、さらに細かくすると8色あります。昼休みにたてわり班で遊ぶなど、異学年交流を深めています。年間のたてわり班の行事は、大きなものが4つあります。1つ目は、7月に南川で石遊びや川遊びをする「たてわり川遊び」です。2つ目は、9月に行う校内体育大会で、「たてわりまつり」と言いますが、後ほど詳しく紹介します。3つ目は、12月の人権週間に行う「たてわり人権活動」です。4つ目は、1月に行う「たてわり雪遊び」です。

「たてわりまつり」について紹介します。名田庄小学校の運動会は、練習の時から5・6年生がリーダーとなって活躍する場面が多く設定されています。たてわり班で色別に競い合うレースがいくつかあり、子どもたちはそれに向けて練習に取り組んでいます。たてわり班で大玉を運んだり、二人三脚をしたり、長い棒を持って走ったりする種目があります。徒競走はありません。練習は5・6年生が下級生に指示を出しながら行っています。教員は、練習の様子を温かく傍らで見守っています。

たてわり班で子どもたちが主体的に活動するため、運動会と言わずに「たてわりまつり」と言っています。祭という名にふさわしく、運動会の締めくくりは全校ダンスです。振り付けは6年生が考えたものです。9月に入ると、昼休みには、6年生の代表がステージに上がり、下級生に振り付けを教えるのです。この時も、教員は練習の様子を傍らで温かく見守っています。中には6年生の振り付けに合わせて一緒に踊ったりします。私も踊りますが、子どもたちの方が覚えるのも早いです。また、上手に踊ります。

12月の人権週間に行う「たてわり人権活動」は、合同カンファレンスからヒントを得て始めたものです。給食後、各教室で1～6年生が8色に分かれての人権に関する本の読み聞かせをしました。読んだのは6年生です。(名前は仮名です。)

**4年生あきお**

「ともちゃん、あいちゃんのいいところ見つけてあげて、とても優しい人だと思いました。」

**5年生よし子**

「わたしも、あいちゃんのように友達のいいところを見つける人になりたいです。」

読み聞かせを終えて感じたことを、異学年で語り合います。語り合い、話し合いながら人権意識を高めることが目的です。

6年生の読み手の担当になった子は、この日のために何回も練習をしました。10分程度の本ですが、下級生にしっかり聞かせてあげるためには、繰り返しの練習が必要です。

この日の読み聞かせは最高のできでした。読み聞かせの後は、感想を交流しました。交流会の司会進行も6年生です。6年生は春からのたてわり活動を継続的に行っているため、リーダー性が十分育ってきています。リーダーとして十分育った6年生の司会進行のもと、それぞれ学年に応じた素晴らしい感想が出ました。

**(2) 算数の問題解決型学習**

数年前から子どもの学び方に視点を当てた、算数科における問題解決型学習を行っています。次の5つの段階で学習活動を展開しています。「おだい・問題把握」「はてな」「ひとりで」「みんなで」「まとめ」です。詳しくは下記の表の通りです。

- |  |
|--|
| <p><b>I 「おだい・問題把握」</b> →具体的なイメージを子どもたちにつかませます。</p> <p><b>II 「はてな」</b> →既習事項と関連付け、類似点・相違点を明らかにし、課題解決の方法を考えさせ、見通しをもたせます。</p> <p><b>III 「ひとりで」</b> →既習事項を根拠として、具体物を操作したり筋道立てて考えたりして、問題を解かせます。<br/>図に書き込んだり式に書きこんだりして説明できるようにさせます。</p> <p><b>IV 「みんなで」</b> →自分の考えを話し、友達の考えを聞いて、考えを比べながら表現させます。また、図を示しながら話したり、ペア学習やグループ学習を効果的に取り入れ、友達の考えを発表・復唱させたり、友達の式を読んだりさせます。</p> <p><b>V 「まとめ」</b> →算数的用語をキーワードとしてまとめを行わせたり、算数日記を書かせたりします。</p> |
|--|

「おだい」「はてな」「ひとりで」「みんなで」「まとめ」のマグネットプレートを作成し、そのプレートを使用しながら、板書をしています。授業中、どの段階を指導または学習しているかが視覚的に分かるようになっていきます。

「みんなで」の段階では、まず一人一人が考えを言います。そして、その考えの交流を図っています(練り上げています)。この時に、黒板上でそれぞれの考えを比べると深まりが見られます。そのため、一人一人に簡易ホワイトボードを持たせています。学び合いができる問題解決型学習です。

**(3) 名田庄問題解決型ワークショップ**

事後研究会では、公開授業を通しての学び合いが生まれることを期待しています。教員の学び合いが生まれれば、学び合いの有効性や実効性が理解でき、子どもたちの学び合いへとつながると思います。教員の学び合いの場面を必然的に作るために、算数で行っている問題解決型学習を以下のような流れで、参観授業後の研究協議会で取り入れてみました。



**名田庄問題解決型ワークショップ**

- ①コーディネーターよりはじめの言葉 (1分)
  - ②授業者の感想 (2分)
  - ③参観者は付箋に子どもの見取りを書いたものを準備
  - ④4人グループになり、「本時の学習指導過程」の拡大版上で意見交換 (③, ④15分)
  - ⑤授業の課題点(おだい)を見つける
  - ⑥付箋に「おだい」に対する改善点を記入 (ひとり)
  - ⑦改善点をグルーピング(KJ法) (みんなで)
  - (⑤~⑦15~20分)
  - ⑧各グループからの発表 (2分×3)
  - ⑨校内指導主事の感想 (5分)
  - ⑩授業者の今後のプラン発表(まとめ) (3分)
  - ⑪コーディネーターよりねぎらいの言葉 (1分)
- 計50分

子どもたちと同じ学習形態で、教員が参観授業後の研究協議を進めることができます。子どもの思考の流れに寄り添えます。4名のグループに別れて名田庄問題解決型ワークショップを行っています。

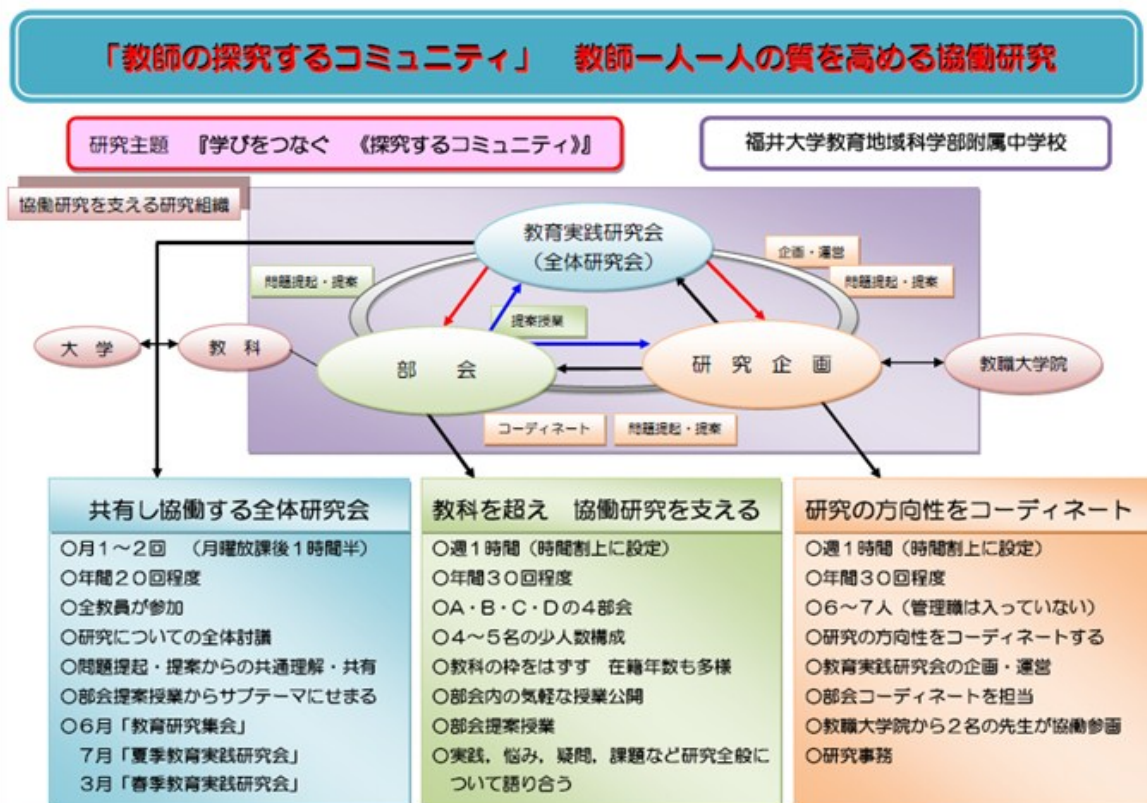
毎回、教職大学院の小林真由美先生、山野下先生、杉山先生に参加していただき、子どもたちの学びの様子をもとに、グループの話し合いが深まるきっかけづくりをいただいています。豊かな自然と雅やかな歴史の残る地で、本校の教員と学び合いを通して、私自身も学び続けていきます。



**福井大学教育地域科学部附属中学校 / 柳 博恵**

NewsletterNo.68のスクールだよりには、本校の3年次サブテーマ「個の学びの推進力を高める、協働探究をデザインする」が決まるまでのプロセスが書かれています。長い時間をかけて、このサブテーマの文言が生まれます。教員全員が教科の枠を超えて、自分の授業実践を振り返り、語り合います。そして、目の前にいる子どもたちの姿を見て、どんな力をつけたいか、どんな力が必要かを話し合う場を大事にしています。そんな話し合いの場が設定できるのは、研究のしくみが成り立っているからだと思います。そこで、今回は、附属中学校の研究体制を紹介させていただきます。

附属中学校の研究スタイルは、指導者や受講者がいて「教える」「教えられる」が固定した講習のようなトップダウンではありません。教師が互いに情報を双方向に送受信し、互いに高め合うミドルアップダウンをめざしています。また、そのような関係を維持する中で、教師の探究するコミュニティが成り立つのだと思います。教師全体で探究していくため、「教育実践研究会」や「研究企画」「部会」などが設けられています。また、それらを支えていただいている「大学教師」や「研究協力者(県内の教員で各教科5名ほど)」の先生方の存在も欠かせません。



### 1. 研究の方向性をコーディネートしていく研究企画

研究企画と呼ばれる組織は、研究主任、教科総括担当、総合総括担当など6~7名で構成されています。メンバーの構成は教科や経験年数、担当学年などの重複についての規定はなく、研究主任の意向が重視されます。

また、研究企画は、毎週1時間、時間割上に位置付けられており、年間30回程度開催されます。その定例研究企画会には福井大学教職大学院の中学校担当の先生方にも毎回参加いただいています。

研究企画の大きな役割は教師全員で行う教育実践研究会と後で述べる部会研究の企画・運営です。教育実践研究会の企画・運営ではそれぞれの会の前に、その研究会で何を議論し、何を報告するのか、その時間配分なども含めて討論されます。そのなかで、全体に提案する事項についても議論が行われています。

また、研究企画の大きな役割の1つが、それぞれの部会の運営です。部会と研究企画会を橋渡ししているのも研究企画のメンバーです。研究企画で話し合われて事柄を部会内で紹介して共有を図ったり、逆に部会で問題になっていることを研究企画会で取り上げ、みんなで知恵を出し合ったりしながら、双方向のやりとりを繰り返し、主題解明に向けての取り組みを推進しています。

### 2. 教科の枠を超え、小回りの利く部会

附属中学校では、教科の異なる4人のメンバーで部会を構成しています。この部会はA部会からD部会まで4つの部会を編成し、誰もがどこかの部会に所属します。部会のメンバーは所属学年や教職経験年数で分けるのではなく、国語・社会・数学・理科・英語の5教科と音楽・美術・体育・技術・家庭・保健の6教科の二群から均等になるようにし、附属中学校での経験年数なども配慮したメンバー構成になります。また、どの部会にも一人ないし二人の研究企画があり、その部会の活動をコーディネートします。

部会研究の内容はその時々において異なります。例えば4月は研究集会の2次案内に掲載する授業構想（「めざし」と呼ぶ）を検討し合ったり、実践の記録を読み取ったりしています。中心となるのが、授業公開とその後の授業研究です。お互いに気楽に授業を見合うことを前提に、指導案なども用意せず、全体に向けて授業が公開されます。同じ部会のメンバーはその授業を参観し、その後の部会内での授業研究で、その授業をどのように見取ったのかを語り合うのです。少人数での部会研究の良さの一つは、少人数であるが故に、気軽に自分の考えを口にできるところです。さらに、部会では年に一回、全教員が参加する授業公開とその授業研究会を担当する。部会内の一人が授業を公開し、他のメンバーが授業記録などを含めて研究会に備えています。おおよその開催の時期は決められていますが、そこでどのような提案をするかなどは部会に委ねられています。

### 3. 協働研究の場である教育実践研究会

月に2回を原則に、管理職も含めた全員が参加する教育実践研究会が行われています。その企画・運営は研究企画です。司会や記録なども研究企画が努めます。この教育実践研究会では、本校の研究全般について話し合われます。

- 4月：研究集会に向けての共通理解と準備
- 6月：「教育研究集会」研究集会の振り返り  
全体授業研究会（A部会）
- 7月：「夏季教育実践研究会」
- 8月：新サブテーマの模索と決定
- 10月~12月：新サブテーマの解明に向けた取り組み  
全体授業研究会（B, C部会）  
後期授業公開（教科別授業研究会）
- 2月：全体授業研究会（D部会）
- 3月：「春季教育実践研究会」

### 持続可能な学校の原理

どこの学校でも、学校をよりよくし、生徒の学びや育ちにそれが現れるようにしたいと願って、取り組んでおられる。けれども、その思いが学校として一つのかたちになって具現化し、しかも深く根をはり根づくという、この持続可能性はたやすいことではない。

それが可能となるのは、複雑な判断部分は個々の教師の専門性にゆだねられ、学校としての原則はシンプルであるからである。「主題-探究-表現」のロングスパンの探究的協働的な学習のみが原理である。仮説検証ではない。またあれもこれもと欲張らない。流行に左右されず、良いとおもった質を大事にする。実践を通して実践を生徒と共に探究する。そこに行きの中で省察、行為についての省察がある。この原理とその学び合いのサイクルの螺旋構造が支えている。自己の課題を捉え、誰もが探究し、表現として生徒も教師も学びを可視化し共有することが求められている。そこが厳しくも譲らないこの学校の要だろう。

ただ先輩のものを受け継ぎ伝承するだけではなく、まさに探究し模索しながら知恵を絞り何がそこに生まれるというプロセス志向で、学校を形成してきた。これがシステムのデザインとその実現となっている。

（「学びを拓く《探究するコミュニティ》第1巻学び合う文化の序から）

これまでの先輩先生方の研究実践があるからといって、それを真似ることだけではいけないと思っています。しかし、附属中1年目の私は、これまでの実践を体験する「真似る」ことから始めました。まずは一度やってみないと分からないから…。自分のスタイルもあったので、純粋に「真似る」ことには抵抗を感じながら、取り組みました。研究紀要に記載されている子どもの学び（学びのストーリー）をもとに授業を展開しました。ロングスパンの良さや活動内容の奥深さ、協働で取り組むことの重要性など、一つ一つ授業実践を通して附属中の学びを私自身が「掴む」ことができました。2年目以降は、オリジナルの工夫を取り入れ、いつ、どこで、どのタイミングで、どんな授業プロセスを構築していくと良いかを常に模索しています。子どもの探究の道筋が見える記録がとても重要であり、記録に残すこと、つまり紀要の重みを感じることができるようになってきたのも2年目以降です。

子どもの学びと教師の学びが歯車のように回転し始めた時から、授業者として何かしら掴みつつあること

を実感できたのです。それまでは、こんなでいいのだろうか?と自分に問いかけ、繰り返し実践事例の記録を読み解くことをしてきました。じっくり、ゆっく

り、じっくりくるまで、時間を必要とする長い歴史を紐解くのも同じです。時間をかけて附属中の脈々と受け継がれた研究を理解しています。

## インターンシップ/週間カンファレンス報告

教職専門性開発コース平成26年度修了生

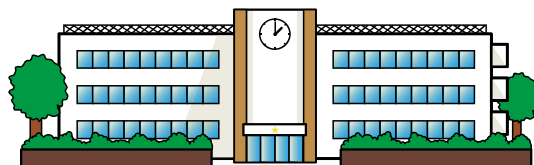
牧田 祥代

3月に入り、早くも今年度が終わろうとしている。4月に入学される院生の方々や初めてNews Letterを読まれた方々に、まずは普段私たちストレートマスターが何をどのように学んでいるのかを紹介しようと思う。

私たちストレートマスターは、1年目はインターンシップ、2年目は課題別実習として各拠点校で実践を積んでいる。毎週木曜は大学で開かれる週間カンファレンスに参加している。このカンファレンスでの午前中の1つ目は「今週の学びの振り返り」である。この時間は、各拠点校での印象的な出来事や考えたこと、悩みなどを小グループに分かれて語り合う。語る過程で自分の考えが明確になり、改めて気付くことも多い。また、他の院生や教員による視点や考え方を聴くことで、自分の視野が広くなり、よりよい実践につなげることができる。午前中の2つ目は、各月の担当院生が自由にテーマを決めて行う「主担当企画」である。先月は附属小・中学校を拠点校とする院生が担当であった。今年度最後の週間カンファレンスということもあり、M2からM1に伝えたい事やこれからの週間カンファレンスの在り方など、今年度のまとめに加え、来年度からよりよいスタートを切ることができるような企画であった。午後からは日々の実践から少し離れ、より大きく広い枠で取り組んでいる。公教育などのアカデミックなことや、各専門教科に分かれて互いの授業の検討などをして、次の授業実践につなげている。そして月に1度月間の合同カンファレンスが開かれる。ここではスクールリーダーの先生方と各月のテーマや専門教科に分かれて小グループで語り合う。現職の先生方と意見を交換することができる貴重な時間である。このように、私たちはインターンシップ又は課題別実習と週間カンファレンス、月間の合同カンファレンスなどを通して、理論と実践を行き来し各々考えを深めている。

週間カンファレンスは2月で終わり、今は課題別実習として拠点校である丸岡南中学校での実践に集中している。課題別実習とは、M1次のインターンシップから自分の課題を見つけ出し、それに焦点を当てて拠点校で実践していくというものである。私は専門教科である英語の授業を課題として設定した。今までは受験のための英語を教えればいい、知識を伝達すればいい、と考えてきた。しかしこのような考えで行った授業は教科書をなぞっているだけになってしまい、生徒の表情もぱっとしない。そこで週間カンファレンスで他の院生や教員から、生徒の言いたいことを言える授業を目指したらどうかという指摘を受けた。例えば、I want to be～。(私は～になりたい。)を習得する時、私は生徒に将来の夢を考えさせた。しかし生徒は「いきなりそのようなことを言われても…」という様子で、思考が止まっている生徒も多くいた。そこで出された案が「～になりたくない。」を多く考えさせるというものだった。そうすると生徒にとって考えやすく、他の生徒はどのように考えるのか知りたくなり、積極的に活動できるだろう。このような授業を考えるためには、生徒が今どのようなことに興味があるかなどについて知っておく必要がある。そしてそのためには生徒のことを理解しなければならない。生徒同士や生徒対教師の信頼関係が授業の土台であるということによりやく気付くことができた。

このような気付きを得ることができたのは、拠点校での実践や週間カンファレンスなどで多くの人に支えられてきたからだと思う。自分一人でなんとなく実践し、振り返っただけでは自分の殻に閉じこもったままだったであろう。様々な人と関わり、支えられ、多くの考えに触れることの大切さを感じた2年間であった。いよいよ4月から現場に入ることとなる。多忙な日々になるだろうが、毎日を振り返り、多くの人との関わりを大切にしながら学び続けていきたい。



## 研究集会・公開研究会などの報告

## 実践研究ラウンドテーブル in 静岡

## 実践研究ラウンドテーブル in 静岡は何をめざすのか ～そのねらい及び成果と課題～

静岡大学教育学部 学部長 梅澤 収

静岡大学の“実践研究ラウンドテーブル in 静岡”

(以下、静岡実践ラウンド)は、福井大学共催、静岡県・静岡市・浜松市後援を得て、第1回(2014.1.25)、第2回(2014.11.23)と実施されてきた。ここで改めてそのねらい、及び成果と課題をまとめておきたい。

初発の契機は、2012年度の文部科学省の公募プログラム「大学間連携共同教育推進事業」に教員養成版(バージョン)として福井大学が採択され、静岡大学がこの「ナショナルな連携・協働組織」(後に、福井大学“教師教育改革コラボレーション”となる)に参加したことである。当時の静岡大学は、教員養成改革の基本的方向性を、「静岡県内の教育関連諸機関及び国内外の教員養成系大学と連携し、‘Act Globally, Nationally & Locally’の観点から教員養成の高度化を行う」と確定しつつあり、ナショナルな連携・協働の具体的在り方としてその参加は意義あるものと判断した。そして、2013年度に入り、ナショナルな「教師教育改革の連携・協働」の一環として、静岡で福井大学の実践研究ラウンドテーブルのようなものが開催できないかという打診があり、学内関係者と協議し引き受けることにした。その基本コンセプトは、福井大学実践ラウンドに学びながらも、現職教員を対象とした「学校マネジメント力育成」を組み込んだ内容とし、ナショナルな連携・協働において静岡の特徴を出すことであった。学校マネジメント力育成の視点を重視する理由は、「養成＝大学、採用・研修＝教委という棲み分け論を脱して、養成・研修統合型システムの構築へと改革をすすめる」ためには、大学が組織的対応をしてこなかった研修段階を組み入れた取組みを組織的かつ意識的に行う必要があるからである。具体的には、①教育委員会や県内の教職課程を置く大学と連携・協働して、大学が組織として教員研修の設計・デザインに参加協力するとともに、その研修成果に対する適切な評価方法(単位の内容・方法・評価基準等)を開発して大学・大学院のカリキュラム化・単位化を行うこと、②教育委員会と連携・協働して、教師の職能成長を支援するための教育プログラムのモデル開発を大学が実施すること、である。このような研修/教育プログラムが構築されることによって、「学び続ける教員像」を実質化していくことができると考えている。これは、教員養成大学学部の組織改革論として極めて重要な視点であり、静岡大学が、教育学研究科附属「教員養成・研修高度化推進センター」を2014年度に設置した根拠でもある。静岡実践ラウンドは、このような構想の中に位置づけられている。

### 第1回のねらいと構成、成果と課題

第1回のねらいと構成は、上記の経緯と趣旨をふまえつつも、県内の教育関連諸機関と連携し教員養成・研修を考え実践する第一歩として、「腹を割って意見交換ができる場」を創ることにした。より多くの学校教育関係者に参加してもらいたいとの思いで、「教師の力量アップを支える学校～実践研究ラウンドテーブル in 静岡」と題して、2つの小テーマ(「A. 教師の成長」と「B. 学校のマネジメント」)を設けて午前中に行われた。参加対象として念頭においていたのは、県内や県外の教諭、管理職、指導主事と大学教員であった。なお、「教師の成長を(Wo: rld)に聴き合う」をキャッチフレーズとした。午後は、別の採択プログラムによるシンポジウム「成長し続ける教師と静岡の教育～新時代を担う学校と教育行政のあり方を考える～」を行った。そのキャッチフレーズは、「静岡の教育を(Wo: rld)に語る」である。

第1回の成果と課題についてである(以下は、世話人 洪江かさね准教授の報告書(2014.3.31)による。)第1に、予想外の参加者があった。参加者は、総計121名、静岡県内96名、静岡県外25名であった。内訳は、静岡県内96名(うち静大教員12名、静大教職大学院生11名、静大教職大学院生修了生15名)、静岡県外25名(うち福井大学関係者7名)であった。

第2に、静岡大学教育学部と、福井大学ほか県外の教員養成系大学(和歌山大学、宮崎大学、北海道大学など)との間に、「ナショナルな連携」の基盤を構築することができた。

第3に、サブテーマ「教師の成長」は、幅広い世代の教師の参加を願い設けた。実際に、若手から熟練までの教師の参加があった。教師は多忙なため、自分自身の歩みをふり返って確認する機会、熟練の知恵を若手が継承する機会、若手の歩みに熟練が学ぶ機会といったものを、なかなか持てない。その意味で貴重な機会を提供できた。

第4に、サブテーマ「学校のマネジメント」について6つの小グループ(教職大学院が力を入れたい領域)を編成したが、県総合教育センター指導主事や大学教員に加え、校長、教育長、事務職員、元社会教育委員、教職大学院生など、多彩な教育関係者が集まった。いずれのグループでも、報告者の取り組みを傾聴した上での、忌憚のない意見交換ができたとの報告があった。

第1回の課題としては、(1)県外からの参加者の確保のために時期や広報の工夫する必要がある、(2)半日

でラウンドテーブルを実施したために時間的なゆとりがなかった、(3) 1グループあたりの人数を7~8名から6名程度とする必要性、(4) 静岡大学教職大学院生の参加の工夫（時期やカリキュラムへの位置づけ等）、その他である。

## 第2回のねらいと構成、成果と課題

第2回のラウンドテーブルは、上記の成果と課題をふまえてつづも、基本コンセプトに関わる論点として、「子どもの育ちに関わるおとな—公民館職員、地域活動実践者、ボランティアコーディネーター、PTA役員、学校支援地域本部コーディネーターなど」や「教育学部で教員や社会教育の仕事につくことを志す学部生」も参加してほしい、ということである。

渋江（静岡大学イノベーション社会連携推進機構「ニューズレター第30号 地域と大学」2015.3）によれば、「教育委員会、学校、大学という関係者のみで教員養成と研修のあり方を考えあうのではなく、もう少し広い視野で一領域は違っても子どもの育ちに関わっている・将来関わりたいという共通性の中で一考えあう」ことである。企画書（2014.6.30）によれば、「教師と学校を支える、学びあうコミュニティを培う」と題して、前回に続き「A. 教師の成長」と「B. 学校のマネジメント」の2テーマで行うが、次の内容で行うこととした。

- 11月下旬に1日のラウンドテーブルとし、午前と午後にかけてじっくり語り、聴き合う構成とする。また、午前と午後それぞれ語り合い聴き合うために参考となるミニ講演を置いた。
- 「A. 教師の成長」に関しては、教員がみずからのあゆみや実践について、小グループで時間をかけて語り聴いてもらうことで、自己のあゆみや実践の価値を確認する機会を提供すること。その際に、教員だけではなく、教育に関心をもつ異分野の人びとを含んで、異質なものからの視点を入れて学びあう機会としたい。
- 「B. 学校のマネジメント」に関しては、小中一貫教育や、コミュニティスクールなど、（学校）マネジメント力が問われる政策が推進される中で、組織マネジメントに関わる現場の実践や、教員の組織マネジメント力を養成するために大学と県教育委員会が協働して取り組んできた実践交流をする。グループは、教員だけではなく、教育に関心をもつ異分野の人びとを含んで構成し、「学校のマネジメント」に関する展望を切り開く機会を提供したい。

第2回報告（2014.11.28）によれば、成果は次の通りである。

第1に、参加者89名で、県外からの参加者は19名であった。参加者の属性は、最も多いのは教員（現職院生含む）であり、そのほか指導主事、学校管理職、事務職員、大学教員（教育学系、看護系）、静岡市教育長、元静岡市教育委員長、学校支援地域本部コーディネーター、公民館職員、地域活動実践者、PTA役員、ボランティア協会職員、女性学習財団職員等の参加があった。共催の福井大学教職大学院からは7名が参加した。学内の参加者については、静岡大学教職大学院生12名（1年生9名、2年生3名。うち5名は報告者）、静岡大学教職大学院修了生10名（総合教育センター指導主事2名、地教委指導主事1名、小学校教員3名、中

学校教員3名、特別支援学校教員1名。うち5名は報告者。1名はファシリテーター）、静岡大学教育学部および教職大学院教員15名、静岡大学教育学部生4名（3年生1名、4年生3名）であった。

第2に、参加者からはおおむね好評価を得た。ラウンドテーブルの構成がよかった、異なる校種・職種の人との交流により連携の必要性を自覚した、ほかの人の視点から自分の実践を省察し今後を考える機会となった、など。

第3に、静岡県下の教員の資質向上の機会、大学と教育委員会が互いの実践を交流しともに教員の資質向上を考える機会、教員が子どもにかかわる他職種等との交流の機会、教職大学院修了生と教育学部卒業生の資質向上の機会として、ラウンドテーブルを一層発展していくことの必要性を、主催者側として自覚する機会となった。

課題としては、第1に、教育委員会及び静岡県外の参加者等を増やしていくことがあげられる。

## 実践ラウンドの在り方をみんなで考えていこう

ところで、第2回静岡実践ラウンドに参加された福井大学教職大学院のみなさんの感想と省察が、福井大学教職大学院編集・発行『教職大学院Newsletter No.68』に寄せられている。その中では、静岡のラウンドの取り組みに参加して、あらためて自身の経験、福井で取り組みの中で自明なこととしていたことの意味が照らし返されたことが、参加者の省察として記されている。会の始め方、趣旨や方法の説明や、グループの設定にも、それぞれの取り組みの状況をふまえた選択と意図がある。自他のアプローチを照らし合わせることによって、それぞれの状況と意図が照らし出され、その意味が問い返されることになる。そうした省察に触れ、静岡実践ラウンドの企画組織にあたったメンバーの間でも、改めて、静岡ラウンドでの取り組みの意味について様々な議論が行われた。

導入の仕方についても、今回の静岡ラウンドでは、多様な領域や立場の人びとがそこに参加する実践ラウンドであるため、「実践を語り聴きあって学びあう」を成り立たせるための「趣旨や方法」、とりわけ「聴きあう」を成り立たせるための「注意」のような事柄—それらには「こういう学び方をつくっていききたいですね」という思いを込めた—を伝える必要があると判断してそうしたやり方を選んできている。おそらく論点は、「ラウンドテーブルはどうあるべきか。そして、参加される方々に対して、どのような力を付けてもらう場であるべきなのか。またそのためにどのような内容構成や方法を行うべきなのか」ということであり、現在でも意見交換をしているところである。なお、この点に関連して、静岡大学の教職大学院のカリキュラムは、福井大学教職大学院とは異なり、「学校拠点方式のような形で実践と省察を繰り返す中で学んでいくこと」を主軸としておらず、また、ラウンドテーブルも現状では教職大学院のカリキュラムとは切り離されていることを指摘しておきたい。一方、これらは、今後の検討すべき改善課題であることも認識している。

以上、2012年度から福井大学「教師教育改革コラボレーション」に加わったことを契機に始まった静岡実践ラウンドであるが、静岡大学は、教員養成・研修統

合型の教師教育システムの構築（日本型教師教育システムの再構築）という大きな構想を念頭におきながら、時々具体的な成果と課題を検証しながら、試行錯誤しつつ企画と実施を行っている。これまで福井大学や宇都宮大学、また大阪教育大学等においても多様

な実践ラウンドが行われているが、それらに学びながら、今後も「実践を語り聴きあって学びあう」ことの意味や価値、そしてそのデザイン・方法についてみなさんと意見交換しながら取り組んでいきたいと考えている。

## 教育復興シンポジウム 福島の教育復興に向けてIV

### 教育復興シンポジウム

#### 「福島の教育復興へ向けてIV」に参加して

福井大学教職大学院 コーディネーターリサーチャー 加藤 正弘

文科省参事官、福島県教育庁理事の祝辞で始まったプログラムは二部構成となっており、第一部は基調報告2件、①OECD東北スクールのチャレンジ～アクティブラーニングの展開～、②学校改革の条件～京都市堀川高校を事例として～。第二部は実践報告とラウンドテーブルという構成。第一部の参加者は70名、第二部のそれは30名であった。①は、福島、宮城、岩手の被災地から中学生・高校生100人を集め、2年半にわたる集中スクールと地域スクールを経て、「2014年8月、

パリで東北の魅力の世界にアピールするイベントをつくる」というプロジェクト学習の経過と結果を報告。午後のラウンドテーブルは、コーディネーターが行った「震災後の学校状況調査」をもとに、福島の教育復興と教員資質向上を語り合い、最後に「かるた」にして表現しようというユニークな取り組み。全体として、復興を視野に入れた教師教育をさぐるイベントとなっていた。



荒瀬克己先生の基調報告



OECD東北スクールの報告



話し合いながら模造紙にメモ。あとでかるたを書く



グループのまとめを報告する教育ボランティア

### 教育復興シンポジウム

#### 「福島の教育復興へ向けてIV」に参加して

福井大学教職大学院 客員教授 西川 満

3月7日（土）に福島市で行われた福島ラウンドテーブル「教育復興シンポジウム 福島の教育復興へ向けてIV」に参加した。午前は第一部「地域の未来を拓く創造的教育復興」をテーマに基調報告が行われた。

まず、福島大学副学長の三浦浩喜氏から「OECD東北スクールのチャレンジ～アクティブ・ラーニングの展開～」についての報告があった。歴史は福島に文明の転換点となる教育を求めている、千年に一度の震災で教育が変わらなかつたら二度と教育は変わらないであろうと熱く静かに語られた。被災地の100人の中高生が集まり、イベント「東北復興祭（環WA）in

PARIS」を開催した。2日間でのべ15万人を集め、震災を乗り越えた東北の若者たちの力を世界にアピールしている映像に大きな感動を覚えた。

次に、この1週間に、福井、福岡、福島と日本で「福」の付く全ての県でのラウンドテーブルに参加したというあの荒瀬克己氏が、「学校改革の条件～京都市立堀川高校を事例として～」と題して講演された。学校はしっかりと学力をつける場所であり、その場限りの「閉じた学び」でなく、基礎基本、活用力、学習意欲の学力の3要素を生涯にわたり学習していく基盤が培われるよう、「新たな学びをデザインで

きる指導力」について学校や教育委員会は直ぐに議論を深めなければならないとの主張に強い共感を覚えた。

午後は「生きる力」と省察的学習コミュニティ」をテーマに、実践報告と教育実践福島ラウンドテーブルが行われた。まず、福島大学の齋藤幸男氏から、行政・学校・大学三者が一体となって、未来を創造する信頼される教師を養成すべく実施している学生ボランティア活動について報告があった。また、コーディネーターの松下行則氏から震災後の学校状況調査結果について、いまだ3%の学校が避難状況にあること、2年前と比べ避難児童に対して特別な指導をしている学校は7%と半減していること等々の報告があり、その後ワールドカフェを行った。一昨年の福島訪問や、全国校長会等でこれまで何度もお聞きしていたが、起きてしまったことからどう学びどう成長したかということが大切であること、震災をとおして教育の在り方を見直し、新しい開かれた学校でもっと子供に考えさせたいという取組みなど今回も心をゆすぶられる話ばかりであった。

りであった。

最後に「教育復興カルタ創り」があり、私は「学び合い 負荷を加えて 楽しんどのい」と感想を記した。



## 平成26年度嶺南教育事務所「教育実践交流会」

### 「発表をもとに交流し、学び合う場」を支えていたもの

福井大学教職大学院 准教授 宮下 哲

平成26年度嶺南教育事務所「教育実践交流会」を終えた会場で不思議な感慨に浸っているとき、ふと交流会の趣旨文書が目にとまり、「教育活動に関する研究や実践の発表をもとに交流を行い、互いに学び合う」という文言に強く惹かれたのを覚えている。それは、会場を後にする参加者の表情や交わされる声に「この会は、単なる伝達や情報提供、報告の会ではなかった」「発表をもとに交流し、学び合う場だった」という実感が語られていたことによるのかもしれない。

私の中にあつた不思議な感慨も、この会が上記のような場であったとの実感があつたからだと思うのだが、「何を」「どのように」交流し学び合ったのかを掘り下げたとき、この取組の意味に思い至る。その詳細をこの紙面でつまびらかに記すことはできないが、提案内容の真偽やその適用について検討することよりも、発表された実践をもとに、この地域の教育に携わる者のビジョンを共有しようとする学びの場が醸し出す意味をあげておきたい。それは、ビジョンが共有されることで、他者の提案を自分の実践と重ねて理解しようとする意識が高まり、学び合われたことが浸透していくというものだ。あるいは、ビジョンが共有されているので、交流会を終えた後にそれぞれの人の手による多様な実践が生まれ、持続的に展開していく予感がある・・・というものでもある。

この意義は、交流会を企画する嶺南教育事務所の先生方の実践の中で地道に養われ、所員の先生方が実践していることでもありと思われる。右の表は、本教職大学院生で嶺南教育事務所研修課主任指導主事でもあ

る加藤勝代先生が、長期実践報告に紹介されたご自身の教育観の変容をまとめたものだが、四角の枠囲みの記述の変化が印象的だ。右の表には教育する人の主体である「私」という個が、所員や教職員という「集団の中の一員だ」と認識を深めるようになった過程が伺える。長期実践報告からは、加藤先生が「『私』が教える・伝える・支える」という思考や表現ではなく、同僚との実践を通してビジョンや方法を共有する楽しさや意味をとらえつつ、相互に支え合い学び合うという構えをつくったことを読み取ることができた。加藤先生と共に実践している嶺南教育事務所の先生方も、「対象に働きかける自分が対象から働きかけられ、相互に理解し合えるビジョンを獲得したとき、個人も組織も力を発揮する」という実感を心得ているのではない

教育観	教師生活	私からねらった子どもへの支援
教える	事務所以前	①私→担当する子ども (学級指導、部活動)
伝える	事務所勤務 (研究員・2年間)	②私→関わりを持つ (実践研究、研究発表会、研修講座企画運営等を通して)
支える	事務所勤務 (主任・1年目)	②私→関わりを持った教職員→子ども (研修支援、研修講座企画運営等を通して)
	教職大学院 (院生・1年目)	③私→共感する所員→関わりを持った教職員→子ども (ニューズレター、研究チームを通して)
支え合う	事務所勤務 (主任・2年目)	②私→関わりを持った教職員→子ども (研修支援、研修講座企画運営等を通して)
	教職大学院 (院生・2年目)	③私→共感する所員→関わりを持った教職員→子ども (ニューズレター、)
	学校勤務に戻った時のイメージは…	④所員(私)→関わり ⑤教職員(私)



かと思う。交流会に至るまでの1年間の協働研究を通して、嶺南教育事務所の先生方が共有した教育観の変容やそれを可能にした方法についての手応えが、交流会を支え、交流会を通して参会者にも移って行ったのではなかろうか。

嶺南教育事務所からの帰路の車中で、巨田客員教授が「チームで研究をしてきたことに意味がある・・・」

と、課題やその背景、対応策などをチームで共有し、所属全員で分かり合おうとしていることの意味を語られた。ビジョンを共有し、立場が異なっても探究できるテーマやフレームを調整していくこと、それを目指して努力することの心地よさや充実感とともに、次の実践への意欲を養う契機となることへの予感に満ちた交流会だった。

## 平成26年度 嶺南教育事務所「教育実践交流会」に参加して

福井大学教職大学院 非常勤講師

中川 美津恵

平成27年2月19日、本学教職大学院の拠点校である嶺南教育事務所の「教育実践交流会」に参加させていただいた。今回は発表会開催20周年を記念して、隣の若狭歴史博物館で「東洋のストラディバリ」と呼ばれた方の制作されたバイオリンの音色を聴くミニコンサートが開会式に組み込まれており、メヌエットなど数曲を堪能する機会に恵まれた。ご夫婦によるバイオリンとビオラの息のあった二重奏。各自の個を主張しながら、調和が醸し出された演奏は、教育の求める姿を髣髴とさせ、続く研究や実践発表の期待が高まっていくのを感じた。嶺南教育事務所のこの時期の発表会は、例年、「教育研究発表会」と銘打っていたと記憶するが、今回は「教育実践交流会」とあり、さらに「広げよう！学び合いの輪」と掲げられたスローガンと相まって、研究や実践が一方から発信され、片方が受け取るといったものではなく、双方向のやり取りにより互いの教育力向上が図られるよう腐心された田中治所長はじめ、嶺南教育事務所総員の意気込みを感じ取られるものであった。

第1発表から第3発表まで、計14本の発表が2会場で行なわれた。今回印象的だったことは、チームを核とした研究が推進されたことである。嶺南教育事務所では「学校規模適正化研究チーム」「情報教育研究チーム」「人権教育研究チーム」「生徒指導研究チーム」「学力分析研究チーム」の5チームが編成されている。発表は代表の研究員が担うが、研究に取り組んだのはチーム全体であった。もちろん発表者が中心となって研究が進められたのであろうが、研究理念や思想といったものが年間を通して、チーム全体で検討され、練られ、育まれているので、代表者も自信を持って発表されていたように思う。また、チームは所全体に支えられており、発表が前向きで、明るいイメージが感じられた。

筆者は「情報教育研究チーム」が担当したICTを活用した授業づくりの発表を拝聴し、主にタブレット端末で何ができるのか、授業がどのように変わっていくのか、ICTを使う点で注意すべきこと等、多くのことを学んだ。聴き手も実際にタブレット端末を操作する機会が与えられ、分かりやすい発表となった。一方で、活用や情報モラルを指導する教師の能力向上、行政の支援など課題も散見され、発表主題の「すべての子どもがわかる授業を目指して」の授業づくり、平成25年6月閣議決定された「ITを活用した21世紀型スキルの習得」に至る道の容易ならざることを痛感した。

学校現場からの実践報告では、県立敦賀高等学校

「学力向上対策室の取り組み～1年間の活動を通して～」の発表をお聞きした。県の最重要課題「学力向上」に向け、授業に限らず教育活動全体で推進すべきと、全教職員挙げて取り組んだ活動の総括が示された。敦賀高校では、校務分掌や学年、教科といった単位でなく、それらを横断し、より効率的に取り組めるよう、「学力向上対策室」を置いている。明確な目的を示した、そのものずばりのネーミング、「学力向上対策室」。「室」の設置は画期的な組織と思う。対策室は、対象（全教職員、若手教員、中堅教員、希望者、生徒、の5つ）毎に多彩なプログラムを実践している。最後に発表者から「これからの嶺南における教育課題、チーム嶺南として取り組めることは？」と問題提起があった。地元の子は地元が育てる、そうでないと流出してしまうだけの地域になってしまう、そのためには小中高の接続連携に向けた取り組みが重要ではないか、また、高校としては自校の取り組みを地元の小中学校にもっと知ってほしいと要望があり、これに応える形で、所長が「福井型18年教育」を目指す拠点として嶺南教育事務所があることを力説された。現場の「チーム嶺南」に結集せんとする熱い思いに触れ、また行政の支援が大いに期待されるころである。

他の発表も学校現場に還元できる主題を扱っており、全ての発表を聴くことができないのは時間の制約があり、やむを得ないが、残念である。

嶺南教育事務所のチーム会議には、教職大学院スタッフも参加し、協働的学習を進めている。院生の加藤研修課主任（指導主事）が中心となって会議等、準備されておられるのであろうが、今回の会に見事に結実したと思う。

最後に、「教育実践交流会」を企画運営くださった嶺南教育事務所の方々に心から感謝したい。



## 平成26年度修了生の学校改革実践研究報告タイトル

No.	名前	論文名(主タイトルのみ)
202	北條 哲理	子どもの思いを捉えた係わり
203	天谷 美怜	子どもを育てる“教師で在る”ために
204	池田 郁	生徒の未来の姿をまなざし、自ら学ぶプロセスを支える
205	加藤 儀直	一人一人の輝きを大切に
206	角谷 健大朗	省察的実践と実践コミュニティの創造
207	河邊 里紗子	あたたかい関わり合いの中で
208	坂下 元	子どもの姿から学び続ける教師を目指して
209	鈴木 馨	生きる力を培う学習を支える
210	西川 文野	個に寄り添いながら、共に学び合う集団づくりをめざして
211	船木 知憲	生徒の可能性のために
212	牧田 祥代	コミュニケーションを深める授業づくりを目指して
213	宮川 翔太	「教える」から「学ぶ」教師への変革
214	棟田 章裕	子どもの学びを問い続ける教師
215	山越 翔太	“様々なつながり”の中で“学び”続ける教師
216	山本 泰平	環境が育む生徒の主体性
217	青木 敏之	「福祉総合」の運営改善とその過程における教師のコミュニティ形成
218	赤井 孝行	学び合いや協働から学び続ける教師
219	石崎 隆幸	生き生きとして、熱意を持って『わかる授業』づくりに取り組む教師集団
220	稲木 穰	生徒と教師の対等性を基軸とした実践
221	片桐 哲也	高校改革の礎を築く
222	加藤 勝代	学びを求める教師教育により主体的な学習者の育成を図る
223	清常 徹	荒れから脱却し、さらなる高みをめざす
224	源甲斐 恵美	コミュニティをつなぐ、教師をつなぐ
225	竹野 亨	人と人とのつながり
226	谷 康博	「協働」は 教育力を高める
227	玉村 伸一	教師による協働のコーディネート
228	栃川 正樹	学び合う「実践コミュニティ」をコーディネートする
229	中村 敏明	学校文化の継承
230	野尻 友佳子	つながりと学びによる自己肯定感の高揚
231	船谷 友代	福井県における就学相談の実際と福井県特別支援教育センターの役割
232	古市 利明	支え合い、学び合うコミュニティへの挑戦
233	山本 寛	研究・研修機関所員の力量向上を支えるコミュニティ
234	多田 哲也	子どもを中心に人がつながりあうことを目指して
235	永廣 裕子	「探究するコミュニティ」により子どもたちを育む
236	柳 博恵	持続性へのチャレンジ

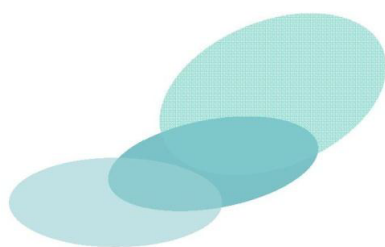
平成27 (2015) 年度 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻 年間計画 2015.4.4

4	1 水	7	1 水	10	1 木	1	1 金
	2 木		2 木		2 金		2 土
	3 金		3 金		3 土		3 日
	4 土 開講式(1・2年ともに出席)		4 土 合同カンファレンス(9:30-14:30) 大学院説明会(15:00-17:00)		4 日		4 月
	5 日		5 日		5 月		5 火 集中講座 長期実践研究報告作成 (9:30-17:00)
	6 月		6 月		6 火		6 水
	7 火		7 火		7 水		7 木
	8 水		8 水		8 木		8 金
	9 木		9 木		9 金		9 土
	10 金		10 金		10 土		10 日
	11 土		11 土 合同カンファレンス予備(9:30-14:30)		11 日		11 月
	12 日		12 日		12 月		12 火
	13 月		13 月		13 火		13 水
	14 火		14 火		14 水		14 木
	15 水		15 水		15 木		15 金
	16 木		16 木		16 金		16 土 長期実践研究報告作成 予備
	17 金		17 金		17 土 合同カンファレンス(9:30-14:20*) ※長期実践報告作成のためのガイダンス(14:20-17:00) オープンキャンパス・大学院説明会(予定)		17 日
18 土 合同カンファレンス(9:30-17:00)	18 土 ※1aか1bいずれか一方に出席してください	18 日	18 月				
19 日	19 日	19 月	19 火				
20 月	20 月 集中講座 (9:30-17:00)	20 火	20 水				
21 火	21 火 1a ※ 教員免許更新講習 必修①	21 水	21 木				
22 水	22 水 集中講座 1b ※	22 木	22 金				
23 木	23 木	23 金	23 土				
24 金	24 金	24 土 合同カンファレンス予備(9:30-14:20*) ※長期実践報告作成のためのガイダンス(14:20-17:00)	24 日				
25 土 合同カンファレンス予備(9:30-17:00)	25 土	25 日	25 月				
26 日	26 日	26 月	26 火				
27 月	27 月 集中講座 (9:30-17:00)	27 火	27 水				
28 火	28 火 2a* 教員免許更新講習 必修②	28 水	28 木				
29 水	29 水 集中講座 2b*	29 木	29 金				
30 木	30 木	30 金	30 土				
31 金	31 金	31 土	31 日 長期実践研究報告締め切り				
5	1 土	8	1 土	11	1 日	2	1 月
	2 土		2 日 ※2aか2bいずれか一方に出席してください		2 月		2 火
	3 日		3 日		3 火		3 水
	4 月		4 火		4 水		4 木
	5 火		5 水		5 木		5 金
	6 水		6 木		6 金		6 土
	7 木		7 金 教員免許更新講習 必修③		7 土 附属幼稚園 教育研究会		7 日
	8 金		8 土		8 日		8 月
	9 土		9 日		9 月		9 火
	10 日		10 月		10 火		10 水
	11 月		11 火		11 水		11 木
	12 火		12 水		12 木		12 金
	13 水		13 木		13 金		13 土 長期実践研究報告会(9:30-12:30)
	14 木		14 金		14 土 合同カンファレンス(9:30-14:30*) ※長期実践報告作成のためのガイダンス(14:30-17:00)		14 日
	15 金		15 土 ※3aか3bいずれか一方に出席してください		15 日		15 月
	16 土 合同カンファレンス(9:30-14:20) オープンキャンパス・大学院説明会(予定)		16 日		16 月		16 火
	17 日		17 日		17 火		17 水
18 月	18 月 集中講座 (9:30-17:00)	18 水	18 木				
19 火	19 火 3a** 教員免許更新講習 必修④	19 木	19 金				
20 水	20 水	20 金	20 土				
21 木	21 木 集中講座 3b**	21 土 合同カンファレンス予備(9:30-14:20*) ※長期実践報告作成のためのガイダンス(14:20-17:00)	21 日				
22 金	22 土 オープンキャンパス・大学院説明会(予定)	22 日	22 月				
23 土 合同カンファレンス予備(9:30-14:20) 大学院説明会(京都・金沢(予定))	23 日 大学院説明会(京都・金沢(予定))	23 月	23 火				
24 日	24 月	24 火	24 水				
25 月	25 火	25 水	25 木				
26 火	26 水	26 木	26 金 プレセッション(17:00-19:00)				
27 水	27 木	27 金	27 土 シンポジウム(12:40-17:20)				
28 木	28 金	28 土	28 日 ラウンドテーブル(8:20-14:00)				
29 金	29 土	29 日	29 月				
30 土	30 日	30 月	1 火				
6	1 月	9	1 火	12	1 火	3	2 水
	2 火		2 水		2 水		3 木
	3 水		3 木		3 木		4 金
	4 木		4 金		4 金 附属小学校 教育研究会		5 土
	5 金 附属中学校 教育研究会		5 土		6 日		6 日
	6 土		6 日		7 月		7 月
	7 日		7 月		8 火		8 火
	8 月		8 火		9 水		9 水
	9 火		9 水		10 木		10 木
	10 水		10 木		11 金		11 金
	11 木		11 金		12 土		12 土
	12 金		12 土		13 日		13 日
	13 土		13 日		14 月		14 月
	14 日		14 月		15 火		15 火
	15 月		15 火		16 水		16 水
	16 火		16 水		17 木		17 木
	17 水		17 木		18 金		18 金
18 木	18 金	19 土 大学院説明会(15:00-17:00)	19 土				
19 金	19 土	20 日 大学院説明会(京都・金沢(予定))	20 日				
20 土	20 日	21 月	21 月				
21 日	21 月	22 火	22 火				
22 月	22 火	23 水	23 水 学位記伝達式(18:00)				
23 火	23 水	24 木	24 木				
24 水	24 木	25 金	25 金				
25 木	25 金	26 土	26 土				
26 金 プレセッション(17:00-19:00)	26 土	27 日	27 日				
27 土 シンポジウム(12:40-17:20)	27 日	28 月	28 月				
28 日 ラウンドテーブル(8:20-14:00)	28 月	29 火	29 火				
29 月	28 月	30 水	30 水				
30 火	29 火	31 木	31 木				
	30 水						

# 実践し 省察する コミュニティ

*Fukui Round Tables:  
Summer Sessions  
For Reflective Practice  
And Organizational Learning  
In University of Fukui*

*For Communities of Practice and Reflection since 2001*



2015.6.26-6.28

実践研究 福井ラウンドテーブル

2015 summer sessions

## Schedule

4/4 Sat 平成27年度 福井大学教職大学院 開講式

4/18 Sat - 4/19 Sun 合同カンファレンス 4/25 Sat - 4/26 Sun 合同カンファレンス（予備日）

### 【編集後記】

2015春セッションの「実践研究福井ラウンドテーブル」も700名を越える参加者で盛り多き研究会となりました。各ゾーンや2日目のラウンドでの学び合いの報告からは探求する教師たちや実践研究組織の方たちの熱い思いが伝わってきます。また、静岡・福島ラウンドの報告からも全国への広がりを感じさせてくれます。さて3月は別れの時、退任されるスタッフ、新天地に向かっていく卒業生、それぞれの今後の活躍を祈ります。そして4月、新たなメンバーを迎えてのスタートです。（山野下とよ子）

教職大学院Newsletter No.71

2015.4.4発行

2015.4.4印刷

編集・発行・印刷  
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻  
教職大学院Newsletter 編集委員会  
〒910-8507 福井市文京3-9-1  
dpdtfukui@yahoo.co.jp